

名古屋柳城短期大学
第1回東日本大震災復興支援
ボランティア活動報告書
2011年9月1日～4日



日本聖公会東日本大震災被災者支援

目 次

| | |
|-----------------------|----|
| 第1回東日本大震災ボランティア活動について | 1 |
| 活動概要 | |
| プログラム | 3 |
| 写真で綴る四日間・わたしたちが見た被災地 | 4 |
| ボランティア参加者名簿 | 8 |
| 訪問先・宿泊先一覧 | 8 |
| 参加者の感想 | 9 |
| 関連資料等 | 38 |
| あとがきにかえて | 42 |

種蒔き

マーガレット・ヤング

翼ひろげた天使が
愛と真理と光明との
種子をひと粒手に持って
飛ぶのを止めて考えた。
「これが大きくなったなら、
すばらしい実がなるように
どこへ蒔いたらよいのだろう」
救い主さま、それを聞いて、
にっこりわらっておっしゃった。
「私のために その種子を
子どもに蒔いておくれ」

名古屋柳城短期大学 第1回 東日本大震災ボランティア活動について

名古屋柳城短期大学
キリスト教センター
尾上 明子

3月11日午後2時46分、かつてない地震、そして大津波、原発事故が起こり、日本中、いえ、世界中がその恐怖に震撼とさせられ、多大な犠牲が伴ったこと、そこからの発生した様々な問題が現在も続いていることはご存じの通りです。

3月より、発足したばかりのキリスト教センターが中心となり、支援物資の募集をはじめ、学生宗教委員、クラス委員を中心として、柳城として何ができるかをたびたび考え、子どもたちへささやかなカードや小さな工作のプレゼントをすること、また、図書委員会、宗教委員会では、本学の紙芝居プロジェクトが主催するキッズ紙芝居コンテストでの優秀作品（印刷）や絵本を被災地の幼稚園へ贈る活動をしてきました。当初から、現地でのボランティア活動の要望はありましたが、様々な危険要素もあり当分は見合わせる事となっていました。7月になり、大学の方針も決まり、日本聖公会東日本大震災被災者支援「いっしょに歩こう！プロジェクト」の活動に急遽参加させていただくことになり、本学、キリスト教センターが中心となり、計画・実施を担当することとなりました。7月上旬からの取り組みであったため、非常に慌しいなか準備をすることになり、下見は、7月下旬、学長、菊地先生、法人事務局松本さんが現地スタッフと打合せをし、どのような内容の活動ができるかの大筋を検討していただきました。また、本学にとっては、卒業生との繋がりも持ちたいという思いから、気仙沼市の愛耕幼稚園との交流も計画しました。7月上旬、ボランティアの募集をしたところ、1日半で定員の2倍以上の学生が応募し、すぐに締め切らざるをえませんでした。潜在的には、まだまだ多くの学生がいたことでしょう。結果的には学生18名、スタッフ6名（下原チャブレン、菊地先生、柴田先生、野村司祭、松本さん、尾上）の引率で2班に分かれて、9月1日（木）～4日（日）の活動となりました。一つは、仙台を拠点にしながら、宮城県度会郡山元町 ふじ幼稚園訪問（園は被災のため仮園舎・区民会館での保育）、南三陸町志津川（フィリピン女性の支援の一環で子どもと交流）、一つは、本学の卒業生とかかわりのある気仙沼市愛耕幼稚園訪問、岩手県一関市室根聖タナエル教会での子ども会主催などが主な内容で、両者のグループの共通は〈被災地に立つ〉ということと〈子どもたちとの交流〉でした。

ボランティアというには、到底及ばない活動でしたが、現地に立ち、厳しい現実を自分の目で見、体験者のお話を聞くという経験は何にも代えがたいものとなりました。子どもたちとの交流を通して励まされ、子どもたちの心の傷に触れ、多くを考えさせられ学ばされました。また、園長先生や他の先生方のお話から、保育に携わる方々のまさに命をか

けての保育や支援に「保育とは何か？」という原点を見せていただいたように感じました。学生一人ひとりの新鮮な感想が本冊子に載せられています。そして、ここから、参加者一人ひとりの心の深いところに刻み込まれている声が聞こえてくるように思います。また、昨年は、そのような想いをなんとか多くの方々に伝えたいという願いから、創立記念礼拝第2部において、この経験を全学で分かち合うときを持ちました。このことのためにも、学生たちは何度も昼休みに集まり、準備をし、当日、参加者全員が声を発し、次に繋がることを願いながら発表をいたしました。学生たちの純粋な想いは、私たち聴く者の心の奥底まで響くものでした。最後になりましたが、この計画実施に当たり、多くの皆さんの祈りとご支援、特に現地で快く迎えてくださった皆様に心より感謝を申し上げます。



「いっしょに歩こう！プロジェクト」

東日本大震災復興支援ボランティア活動

日程：2011年9月1日（木）～9月4日（日） 3泊4日

活動拠点：

【青葉静修館】

宮城県仙台市青葉区小松島3丁目1-77

【室根聖ナタナエル教会】

岩手県一関市室根町折壁字屋敷中104-5

| 9月1日(木) | | 9月2日(金) | | 9月3日(土) | | 9月4日(日) | |
|---------------|---|-------------------------|---------------------------|-------------------------|-------------------|---------------------|---------------|
| 青葉グループ 室根グループ | | 青葉グループ | 室根グループ | 青葉グループ | 室根グループ | 青葉グループ | 室根グループ |
| | | 朝食 | | | | | 朝食 |
| 7:00 | | | 出発 | | | | 掃除片づけ 室根出発 |
| 8:00 | 集合(名駅銀の時計) | 出発 | | 朝食 | 朝食 | 朝食 | |
| 9:00 | 9:20 名古屋発 のぞみ218号 | | | 出発 | | | |
| 10:00 | 引率:菊地・下原 | 山元町に再開した ふじ幼稚園 訪問 | 気仙沼市 愛耕幼稚園訪問 | | ①午後のプログラ ム準備 | 片づけ・清掃 | 教会着 |
| 11:00 | 11:03東京着 11:28東京発 | | 影絵公演見学 | | ②集落の家を訪 ねてPR活動 | 主日礼拝出席 (仙台教会) | |
| 12:00 | はやて165号 | 幼稚園で 昼食を共に | 園児と共に昼食 | 被災地に立つ② 「南三陸町」 | 昼食 | 昼食 | |
| 13:00 | 13:16仙台着(東口) | | 園長先生のお話 を聞く | 志津川ベイス イドアリーナ着 昼食 | | (仙台教会) | 出発 |
| 14:00 | 被災地に立つ① | 園長先生のお話 を聞く | 幼稚園発 | フィリピンの子ども たちと遊ぶ | 室根の子ども達 と交流 | 自由時間 買い物等 | |
| 15:00 | 「仙台市若林区荒浜」 | 巨理町の被災した ふじ幼稚園を訪問 | 被災地に立つ② 「南三陸町」 | 子ども5名参加 | 子ども18名参加 | 15:48仙台発 | |
| 16:00 | | 巨理発 | 南三陸町発 | 聖餐式 | | はやて168号 | |
| 17:00 | オリエンテーション (プロジェクト事務所) 野村司祭・長谷川司祭・池住圭姉 | | 気仙沼市にて 夕食・朝食・昼食 買出し | フィピンのお母さん と一緒に | | | |
| 18:00 | | | | アリーナ出発 | ふるさと分校に て入浴 | 17:36東京着 | |
| 19:00 | 夕食 (青葉静修館) | 夕食 | 室根着 | | | 18:00東京発 のぞみ249号 | |
| 20:00 | グループごとに翌日準備 | 青葉静修館着 | 夕食 | | 夕食 | 19:43名古屋着 | |
| 21:00 | | | | 青葉静修館着 | 片づけ | 解散 | |
| | 全員青葉静修館に宿泊 | 青葉静修館泊 | 聖ナタナエル教会泊 | 青葉静修館泊 | 聖ナタナエル教会泊 | | |

わたしたちが見た被災地

「いっしょに歩こう！プロジェクト」

東日本大震災復興支援ボランティア活動 実施報告 名和孝浩（保専2年）

自分たちにできることを



【東日本大震災復興支援ボランティア計画】

「いま、自分に何ができるのか」…3月11日の東日本大震災のあと、被災者の方を想い、誰もが自らに問いかけた言葉ではないでしょうか。私たち名古屋柳城短期大学は、「自分たちにできること」として救援物資や紙芝居を被災した幼稚園などに送るといった活動をしてきました。その支援活動の一つとして、9月1日～4日までの期間で、学生が被災地での復興支援に参加することとなりました。「復興支援」と聞くと、よくニュースで見かけた瓦礫の撤去や炊き出しなどが真っ先に浮かぶのではないかと思います。しかし、私たちは保育課程の学生だからこそできることをしようという思いから、瓦礫の撤去などではなく、被災地で子どもとかかわる支援を選びました。たった4日間でも、自分たちにできることは何か考えながら、学生が主体となって計画が進められました。

はじめて見る被災地

【ボランティア1日目～被災地見学～】

ボランティア1日目、被災地を知るために、津波の被害に遭った仙台市荒浜地区を

訪れました。計画の中で、当然被災地のことも学びます。私たちは、写真や映像で人より多く被災地を目にしてきたはずでした。



それでも、実際に見ないとわからないことって、たくさんありますよね。被災地もそうでした。ここ荒浜沖では、自分の視界に入るすべてがこれです。何もないんです。民家も店もない、瓦礫も撤去され、だだっ広い野原があるだけ。「ここには民家や畑が広がっていました」と言われなければ気が付きもしない。言われても、「えっここに?」と信じられない。今まで見てきた被災地の映像が頭から吹き飛んでしまうような、映像からは伝わらないものが、私たちの目の前にはありました。学生たちの沈黙の中で、「ここで生活している人たちがいるんだよね」という言葉に、今回のボランティアの重大さを感じました。



写真は南三陸町防災対策庁舎と学生

子どもたちに会う、震災を感じる



【青葉グループ～ボランティア2日目～】 ふじ幼稚園訪問

私たちボランティア学生は、主に仙台市を中心に活動する「青葉グループ」と岩手方面を中心に活動する「室根グループ」に分かれ、2、3日目の活動を行いました。

2日、青葉グループは津波によって甚大な被害を受けた宮城県のふじ幼稚園に訪れました。

子どもたちの笑顔の裏に



ふじ幼稚園の子どもたちはよく笑って元気いっぱいでした。前日に被災地を目の当たりにした私たちにとって、子どもたちが笑っていることだけでも、なんだか胸を撫でおろすような気分になります。しかし、その笑顔の裏には、やっぱり震災の恐怖を抱えているのです。ある子どもがブロック

をかなり高く積んでいたようで、学生が「あんまり高くすると危ないよ」と声をかけました。すると、その子から「だって、これなら津波がきても、安心でしょ」と返ってきました。またクラスでは「ねえ、ままごとにする?お葬式ごっこにする?」などと、日常風景の真似をして遊ぶままごとと「お葬式」が同列に並んでいました。さて、これは悲観することか否か。子どもは時折、自分の課題を

遊びの中に見せてくれます。ブロックを積みむ子は、これだけ高ければ津波が来ても大丈夫なんだと、恐怖を乗り越えようとしていたのではないのでしょうか。遊びの提案に「きょうは、お葬式ごっこにしよう」と言った子ども達も、私にはお葬式をもう一度自分たちですること、必死に受け止めようとしているように見えました。子どもたちは震災の恐怖を今も感じているけれど、決してそれだけではありません。笑顔の裏には、震災の恐怖を一生懸命乗り越えようとしている強さが確かにありました。



そんな子どもたちの気持ちを感じた学生だからこそ、かかわりにも熱がこもりま

す。写真のように手遊びや絵本の読み聞かせを行いました。子どもたちに今日



を楽しんでもらいたい」という思いから、どの学生も一生懸命になりました。

震災～休園、そして再開へ



【ふじ幼稚園園長先生との対話から】

ふじ幼稚園は津波の被害が甚大で、園児が亡くなったことや園舎の浸水もあり、震災後、休園を余儀なくされました。しかし、「ふじ幼稚園に戻りたい」という声を受け、園長先生の強い決意とともに、8月中旬から公民館を借りて再開を果たしました。



公民館ですから、幼稚園のようにはできていません。写真の部屋は、

元々「物置」でした。机だって、背の低い座卓です。先生の机は廊下に並んでいました。そ



れでも絶えない子どもたちの笑顔。みんなにとってふじ幼稚園は、先生と子どもたちがいる場所のことだったのだと思います。

震災による新たなニーズ

【青葉グループ～ボランティア3日目～】

志津川ベイサイドアリーナでの託児



震災時のアナウンスを気にしたことはありますか。「津波発生、高

台に避難。」この言葉で戸惑ったのが、被災地で生活していた在留外



国人の方々でした。「大きな波が来ます。高い所に逃げてください。」そう言われればわかるのですが、緊急時は言葉を短縮するため意味が理解できず、避難が遅れてしまったそうです。そこで南三陸町に在住のフィリピン人のお母さんたちから、「もっと日本語の勉強がしたい」という新たなニーズが生まれました。ただ、勉強の間子どもを預ける場所がない…それに應えるため、私たちが子どもたちの託児をすることになりました。被災した方たちのニーズに、自分たちだからこそできること。そんなボランティアになれたかと思います。

まだ、半年

【室根グループ～ボランティア2日目～】

愛耕幼稚園訪問

2日、気仙沼の愛耕幼稚園を訪れた室根グループは、丁度影絵公演をしている方に



出会いました。子どもたちのために、積極的に活動している方からは、何だかパワーを感じます。ここでは、子どもたちとの昼食や園長先生から震災についてお話を聞くことができました。

【愛耕幼稚園園長先生との対話から】

最も印象に残ったのは、「まだ、半年しか経っていないですから」という言葉。私たちが訪れたのは9月、その頃になると「もう半年経ったんだよね」という言葉が聞こ

えていました。被災地に住んでいない私たちから、震災が風化し始めていることを感じました。日々震災と向き合っている人たちにとって、半年という時間はそれを忘れるためにはあまりにも短いのです。事実、園の子どもたちは今でも夜泣きや夜叫が治まらず、先生もまた、そんな子どもたちとともに震災の恐怖と闘っていました。震災から1年が経つ今、被災した方にとっての1年とは…。私たちこそ忘れてはいけないのだと思います。

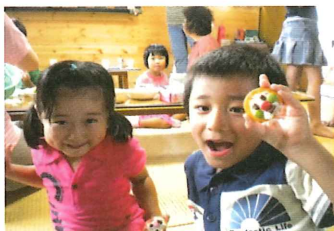
地域の子どもたちと



【室根グループ～ボランティア3日目～】

聖ナタナエル教会での交流

室根グループの拠点となった岩手県の聖ナタナエル教会で、地域の子どもたちを呼び、お菓子作りなどをしました。友達にもなかなか会えなくなった子どもたちに「みんなが集まれる場所」をつくり、思い切り楽しんでもらおう。そんな思いでこの活動はスタートしました。この教会は以前から活動があり、地域交流をしていた方とお母さん方のつながりで、子どもたちも安心して訪れてくれました。人とのつながりに感謝です。



している様子の子も、おいしそうなおやつ

お菓子作りでは、クラッカーやサンドイッチを作りました。緊張

と楽しそうな雰囲気です。初めは泣いていた子どもも、学生と過ごすうちにこの笑顔です。また、絵本の読み聞かせやダンス、ハンカチ落としなども盛り上がり、子どもも学生もずっと笑いっぱなしでした。この笑顔には、「あんまりみんなに会えない」と言ったある子の言葉通り、久しぶりに友達に会えた、ということが大きかったのかもしれない。一人じゃ笑うのは難しいですから。笑いあえる時間って実は特別なものなのだ実感しました。そういった意味で子どもたちにとって、こうしたささやかな活動は、何かしらの価値があったのだと思います。



保育者とはかくあるべき

4日、両グループが合流し仙台教会で主日礼拝に参加したあと、帰路につきました。

帰りの新幹線の中、ふじ幼稚園のこんな話が話題にあがりました。ふじ幼稚園では、震災当日に津波の被害で園児と保育者を乗せた園バスが流されました。民家の間に挟まり止まったバスから、バスに乗っていた先生二人は子どもたちを屋根に避難させていったそうです。そして、バスから子どもたちを屋根に上げ続け、疲労困憊の中泥水を大量に飲んだ一人の先生は、子どもたちが避難したのを見届けるとその場で息を引き取ったそうです。その先生は最後の最後まで「だいじょうぶだよ」と子どもたちに言葉をかけ続けていました。文字通り命をかけて子どもを守ったこの先生をはじめ、被災地で子どもを支える保育者の姿は、将来保育者を目指す私たちに「保育者とはこうあるべきなのだ」と強く決意させるものでした。

ボランティア参加者名簿

| 青葉グループ | | | | | 室根グループ | | |
|----------|-------|----------|-------|----------|--------|----|------|
| 氏名 | 学籍番号 | 氏名 | 学籍番号 | 氏名 | 学籍番号 | 氏名 | 学籍番号 |
| 1 安藤 梢 | 23B03 | 10 中村 紫乃 | 22D35 | 1 加賀 博子 | 23C13 | | |
| 2 江口 綾 | 23B09 | 11 西 優美 | 22D38 | 2 嶋田 沙矢香 | 23C27 | | |
| 3 大島 奈美 | 23B10 | 1 菊地 伸二 | 引率 | 3 田中 ひかり | 23C32 | | |
| 4 伊藤 一輝 | 23C05 | 2 柴田 益江 | 引率 | 4 江島 由里絵 | 22C10 | | |
| 5 竹田 結 | 23C30 | 3 下原 太介 | 引率 | 5 美濃羽 真子 | 22C49 | | |
| 6 田澤 優 | 23C31 | | | 6 森 真理 | 22C51 | | |
| 7 清水 美有紀 | 23D27 | | | 7 名和 孝浩 | 22H07 | | |
| 8 田中 木乃美 | 22A31 | | | 1 尾上 明子 | 引率 | | |
| 9 竹内 杏奈 | 22B30 | | | 2 松本 勝 | 引率 | | |

訪問先

【いっしょに歩こう！プロジェクト事務局】 TEL022-265-5221

〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町 3-4-5 クライスビル 2F

【志津川防災対策庁舎址】

〒986-0762 宮城県本吉郡南三陸町志津川字塩入 77

【南三陸町ベイサイドアリーナ】 TEL0226-47-1131

〒986-0725 宮城県本吉郡南三陸町志津川沼田 56

【学校法人やました学園 ふじ幼稚園】 TEL0223-37-1066

〒999-2201 宮城県亶理郡山元町山寺字西頭無 36-54

(仮園舎)

〒989-2112 宮城県亶理郡山元町真庭字原 65-1 (真庭区民会館内)

園長 鈴木 信子

【学校法人愛耕学園 愛耕幼稚園】 TEL0226-22-6939

〒988-0055 宮城県気仙沼市反松 2-6

園長 白井 嘉男

【日本聖公会仙台基督教会】 TEL022-225-2818

〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町 2-13-15

宿泊先

【青葉静修館】 TEL022-274-0533

〒981-0905 宮城県仙台市青葉区小松島 3丁目 1-77

【室根聖ナタナエル教会】

〒029-1201 岩手県一関市室根町折壁字屋敷中 104-5

参加者の感想

22D35 中村紫乃

9月1日～4日までの被災地ボランティアではとても多くのことを学びました。中でも印象に残っているのは、2日目に行ったふじ幼稚園でのボランティアです。ふじ幼稚園は津波の被害を受けていて仮設幼稚園での保育をしていました。子ども達と関わると地震での恐怖を感じているような印象は受けませんでした。とても素直で優しくて明るい子ばかりでした。しかし、長い時間遊んでいると積み木をたくさん積んで「これだけ丈夫なお家なら地震にも津波にも負けないよね？」と問いかけてくる子、お葬式ごっこをする子、お母さんの話をする前に私に「先生お母さんいる？」と気を遣う子。そういった子ども達のふとした瞬間の行動を見るたびに子ども達の心には半年経った今でも地震の爪痕が残っているのだな、と感じました。

そして私が感動したのはふじ幼稚園の先生方です。先生方だって怖い思いをしたのに子ども達に元気を届けようと笑顔で接していらっしやいました。津波が来たときの先生方の対応も素晴らしいと思ったり、自分じゃあ出来ないだろうと思いました。園長先生も亡くなった子や先生の事を思って、「何度も後悔をした、自分を責めた」と仰っていました。それでも逃げずに亡くなった人達のためにも頑張ろうというその姿勢は本当に尊敬しました。

被災した幼稚園やフィリピンの方々を訪れると、その地域は本当にひどい被害を受けていて家屋は崩壊していて山の木は津波の水がかかった所まで真っ黒になっています。だけど一歩外に出てしまえば、都会が広がっている。まるで別世界でした。東北のお店や道に頑張ろう！東北！という文字を多く見ました。テレビで被災された人に頑張れ！と言ってはいけないと聞きましたが理由が分かりました。東北は十分頑張っていました。だからこそ今、私達がすべきことは頑張れ！と声を掛けることではなく一緒に頑張ることだなと感じました。

そしてボランティアに行かせて頂いて私達が出来る事は今の東北の現状を周りの人に伝えることだと思いました。こうして伝えることで、この東日本大震災のことは忘れてはいけないなと思います。いつまでも忘れずに思っていることが復興の一番の近道だと私は思います。

始めは少し怖いイメージのあったボランティアでしたがみんなと協力しあって東北の方のお手伝いできたことは私の人生に大きな影響を与えてくれました。人と人が助け合うことの大切さを感じました。今こそ私達が助け合うべきときなのです。東北の方達の笑顔がもっとももっとたくさんになりますように。

9月1日（木）から4日間被災地でボランティアをしてみて、まず初めて行った仙台駅は名古屋と同じくらい栄えていてここで地震があったとは思えませんでした。そして車で若林区荒浜へ向かいました。若林区に近づくにつれてテレビで見たことのある光景を目の当たりにしました。家や建物が津波で流されておりガソリンスタンドが津波によって崩れかけていて、私は言葉も出ず津波の恐ろしさを知りました。テレビの画面で見るとは違って、実際に生で見ることで被災地の現状を知ることが出来ました。

2日目は山元町で再開したふじ幼稚園に行きました。私は行く前までは、子ども達とどのように接すればいいのかなど色々考えていましたが、いざ子ども達と接してみるとそんな心配もふっとんでいきました。子ども達はとても元気がよく明るく素直でいい子達ばかりでした。しかし、遊びの中でお葬式ごっこをしている子がいたりして私はとても戸惑いました。園長先生からお話を伺うと、ふつうの4、5歳なら知らない「仮設住宅」や「津波」などの言葉が日常会話から出てくると聞きました。子ども達は見た目では明るく元気でしたが、内面は私たちが知らない何かを背負っているようでした。そして、地震で津波の影響で通園バスや園児、職員が流されたとき先生は園児を助けようと通園バスの上に子ども達を上げたり子どもたちが寒くないようにビニール袋で服を作ったりと必死だったようですが、園児8人と職員1人が亡くなってしまいました。けど、このときに先生は最後の最後まで子ども達の名前を呼んでいたそうです。保育者は子ども達を何があっても守らなければいけません。この責任あることは簡単なことではありませんがこの先生は最後の最後まで自分の任務を果たしたのだなと感じました。今年、就職する私にとって色々考えさせられました。私もこの先生のような保育者になりたいと思いました。

3日目は南三陸町へ行きました。ここは宮城県の中でも最も災害が大きく1日目、2日目に見てきた景色とはまた違って見渡す限り何もなく戦争後の焼野原のようでした。ここではフィリピンのお母さん達がホームヘルパーの資格を取るために字の勉強をしている間、小学生の子ども達を預かって一緒に遊びました。1人1人自己紹介をしたとき、1年生の子が「なみです。」と言ったときに男の子が笑いながら「つなみ～」と言ったときは驚きました。やはり、このような出来事があったからかそっちの方へ繋げてしまったのだなと感じました。幼稚園でも絵を描くときに津波の絵を描くなど震災の影響を受けていて、心に傷を負っているのだなと感じました。

最終日には仙台教会で礼拝に出席させてもらいました。いつも大学で行っている礼拝と違って、驚きました。

私たちはボランティアという立場で被災地に行きました。そこで私たちが見たのは、被災者の方同士が手を取り合って助け合っている場面でした。本来ならこのような状況に陥ってしまったら自分のことしか考えられないと思っていましたが、そういった姿を見て勇気や希望を与える側の私たちが逆に勇気や希望をもらいました。

私はこの4日間でとても多くのことを学びました。この経験を通して私が被災地に行つて感じたことを多くの人たちに伝えていきたいです。

被災地ボランティアに参加して、私は自然の恐ろしさを知りました。ニュースや新聞でよく聞いた南三陸町を見ることができました。この町は自然が豊かでのんびりした空気が流れるとても良い町だと聞きました。車の中から外を見ていると、ある場所から急に緑が少なくなりました。きれいに並んで立っている木は、上の葉っぱまで茶色くなっていて、波がそこまできたという証がありました。私は『戦争の後みたいだ』と思いました。鉄筋の建物がぐにゃって曲がっていたり、大きな病院の上に大きな船が乗っていて、言葉になりませんでした。南三陸町にいた人たちは、安全な場所なんてどこにもなかったんだなと思えば胸が痛みました。

街全体はとても静かで動物も虫も住みつけられない環境になっていました。朝見に行った場所は、夕方の満潮の時間になると海からの水が溢れてきていました。こんな場所が今日本にあると思うと、とても悔しい気持ちになりました。

また、幼稚園を訪問し、東北の子ども達に会うこともできました。私達を見ると、とても嬉しそうにしてくれて、元気な子ども達だなと感じました。でも、一緒に遊んでいると『あれ?』と思うこともありました。「今からお葬式だからみんな静かにしてよ」こんなことも言っていました。遊びの中に身の回りで起きていることが入り込んでくるのは当たり前ですが、お葬式をしていることには驚きました。

この日は雨が降っていて外で遊べませんでした。「雨いっぱい降ってるね」と何気なく言ったことでしたが、子どもからは意外な返事が返ってきました。「雨はこわいね。今日幼稚園きてえらいでしょ」これを聞いて私は、今の子は長靴はいて水たまりとかで遊ぶのとかワクワクしないのかなと思いました。でも最後に先生方と話をした時に、さっき子どもが言っていた意味がやっと分かりました。津波を経験した子どもたちは、水に恐怖心があった、雨が怖いと感じる子がまだいるということでした。

園長先生の話は涙が出るくらい信じられないものでした。園バスで避難している最中に津波にのみ込まれてバスが流されました。みるみるうちにバスの中に水が入ってきて、どうしようもない状況だったと聞きました。そのままではバスの中に水が一杯になってしまうので、先生方がバスの上に子どもたちを上げて助けたと聞きました。でもバスのドアを開けた時に流れて行ってしまった子や、助かったけれど低体温で亡くなった子がいました。最後まで水に浸かって子ども達を助けていた先生も一人亡くなってしまいました。こんな信じられない体験をした子ども達でした。遊んでいる時に「そんなに高く積み上げたら危ないよ」と言えば「高い方が安全だからいいの」と言ったり、「津波に流されちゃったんだ」とつぶやく子がいたり、子ども達の心に大きな傷があるんだなと感じました。

被災した幼稚園の先生方は、私達に本当の保育というものを教えてくれました。命をかけて子どもを守ること、子どもにとって今何が一番大切なのかを考えること。自分を犠牲にしてまで子ども達を守ろうとした先生は本当の保育者だと感じました。

4日間という短い期間でしたが、とても充実した4日間を過ごすことができました。今回東北の地で学んだことは、ずっと忘れずにいたいと思いました。

今回被災地を訪れ、様々な光景を目の当たりにしました。1日目に行った「仙台市若林区荒浜」、2日目に行った「南三陸町」の光景は大変衝撃を受けました。被災地の光景は幾度もテレビで見てきましたが、実際に自分の目で被災現場を見た時は、言葉を失う程の切ない想いを抱きました。無残にも多くの人が生活をしていた家の土台と撤去途中の瓦礫だけが残され、本来住宅が立ち並ぶ土地が、とても広く感じる程変わり果てた土地になっていました。瓦礫の中には、日常生活で使用していたと思われるようなものもありました。その瓦礫と化した私物にはたくさんの人の思いが込められていることと思います。多くの人が犠牲になった南三陸町。防災対策庁舎には、たくさんのお供え物が置かれた献花台もありました。このような光景は想定していたものの、なまなましい被災地の現状を目の当たりにし、言葉にならないほどの心苦しい気持ちを抱きました。

2日目には、気仙沼の愛耕幼稚園を訪れました。愛耕幼稚園では子供たちと一緒に影絵を見たり、昼食を食べたり、楽しい時間を過ごしました。影絵は本格的な機材を使い、2人の影絵職人で演じていました。迫力のある影絵に、子どもたちは勿論、私たちも影絵の世界に引き込まれました。とても2人のスタッフで演じているとは思えないほどの迫力がありました。子どもたちも真剣な眼差しで影絵を見ており、影絵の面白さを感じたことと思います。最後に園長先生が、震災の話をして下さいました。あの日から半年が経った今でも仮設住宅から登園する子どもたちや、震災の恐怖から、夜になるとなきだしてしまう子どもたちもいることを聞き、半年経った今でも生活状況はさほど変わらず、心に負った傷は未だ癒えていないことを、被災者でもある園長先生から直接伺い、リアルな現状にとっても心が痛みました。また、園長先生のお話を聞いている最中、小さな余震が起きました。私ははじめ、余震が来たことに全く気付きませんでした。園長先生は顔色を変えて即座に反応されました。普通の人では気付かない程の小さな揺れでも即座に反応する園長先生の姿から、地震から子どもたちを絶対に守ろうとする強い気持ちを感じました。しかし、保育者も被災者です。それでも、子どもたちのことを全力で守るよう努める姿から、私も、どんなことがあっても子どもたちを最優先に想い、行動できる保育者になりたいと強く感じました。

その日の夜、私たちの活動の主となる岩手県に移動し、聖ナタナエル教会に宿泊しました。今回の被災地ボランティアでは、子供たちが少しでも笑顔になることを目的にプログラムを考え、被災地を訪れました。そして3日目、私たちは岩手県一関市室根の子どもたちと交流をしました。室根の子供たちは私が想像していた以上に元気で優しい子どもたちばかりで、私の方が元気をもらうことができました。一緒にダンスを踊ったりお菓子パーティーをしたりして、楽しい時間はあっという間に過ぎ、子どもたちよりも私たちの方がとても思い出に残る最高のひと時になりました。

この4日間、他では感じる事ができない大変貴重な経験をさせて頂くことができました。

3月11日に大きな地震が起こったとき、私はアルバイト中でした。大きな横揺れで気持ち悪いと思いましたが、ここまで大きな震災になっているとは全く思っておりませんでした。ニュースを見ると、どの局でも震災のニュースしかしておらずとても驚きました。しかし、同じ日本で何も変わらず生活していたので、ニュースで東北の映像をみても、どこかで他人事のように考えていました。

東北へ柳城からボランティアに行くという話を聞いたとき、私は絶対に行く決めていました。震災から半年が経ってから現地へボランティアに行きましたが、半年たった今でも海岸沿いの地区は全く元通りになっておらず、ただ瓦礫などが山積みになっていたりと、家などの建物は土台だけしかなかったりと、半年前にテレビで見た映像と全く変わっておらず言葉が出ませんでした。

2日目からは2グループに分かれて私は岩手県の方へ行きました。そこで震災に遭った幼稚園に伺い、少しの間子どもたちと過ごしました。そこにいた子どもたちと会話を交わす中で、ふと1人の子どもが「〇〇ちゃん、〇〇幼稚園から来たんだよね。〇〇幼稚園、流されちゃったんだよね」と何食わぬ顔で言いました。それを聞いた私は、子どもたちもあの大きな地震や津波を体験し、心を痛めながら毎日一生懸命生活しているんだと感じました。

3日目には室根の子どもたちとお菓子を作ったり、一緒に遊んだりして過ごしました。ある子どもがお母さんと行くはずだった所へ、震災のために行けなくなってしまったという話を聞いて、とても悲しくなりました。最後に子どもたちと全員でハンカチ落としをして遊んだのですが、子どもたちは心の底から楽しそうに明るい笑顔で元気よく走り回って遊んでおり、やってよかったと思いました。また震災が起こったために、学校に行けず、遊ぶ場所もない状況だったと思うので、良いストレス発散になったのではと感じました。

今回、3泊4日でボランティアへ行くことができ、本当に良かったと思いました。海岸沿いの様子もテレビでしか観たことなく他人事のように感じていましたが、実際に自分の目で見ると映像とは比べ物にならないくらい悲惨な状態でした。被災地へ行ったことがない人からしてみると、ボランティアは、瓦礫の撤去作業を手伝うことだったり、食料などの物を提供することだと思いがちですが、実際に一番必要なものは、被災地に暮らしている方々の話し相手になることだと感じました。室根の子どもたちと短い時間だったけど全力で遊ぶことができ、きっと子どもたちも少しの間だけ悲しい気持ちを忘れられたのかなと思います。今回被災地へ行き、現地の方々と関わる事ができて、とても良い経験になりました。また、この経験をまだ被災地へ行ったことのない人々に1つでも多くのことを伝えたいと強く思いました。またこのような機会があれば、必ず参加したいと思っています。

ボランティアをするにあたって、子どもたちとどのように接したらいいのか、とても不安でした。自分の言った一言で、子どもたちを傷つけてしまわないか、辛い思いや悲しい思い、怖かった思いなど、再び思い出させたりしてしまわないかと、すごく考えていました。そして、被災地の現状をこの目で見てみたいと思っていました。

実際に津波で流されてしまった場所を見たとき、言葉が出ませんでした。病院の上に船が乗っていたり、ぐちゃぐちゃになった車がそこら中に転がっていたり、建物が全て流されて、土台だけ残っていたりと、想像を絶するものでした。テレビで見るだけでも怖いと思っていましたが、実際に見ると全然違いました。

わたしは仙台に知り合いが住んでいます。知り合いはみんな無事でしたが、その方が言うには、「津波で被害を受けた人と、地震で被害を受けた人の心の痛みは全く違う」と言っていました。地震の痛みも津波の痛みも私は共感することが出来ませんが、その人たちの痛みを聞くことは出来ます。被災者の方たちが、怖かったこと、苦しかったこと、辛かったこと、悲しかったことのはけ口となることは出来ます。話を聞くことも1つのボランティアだと思います。

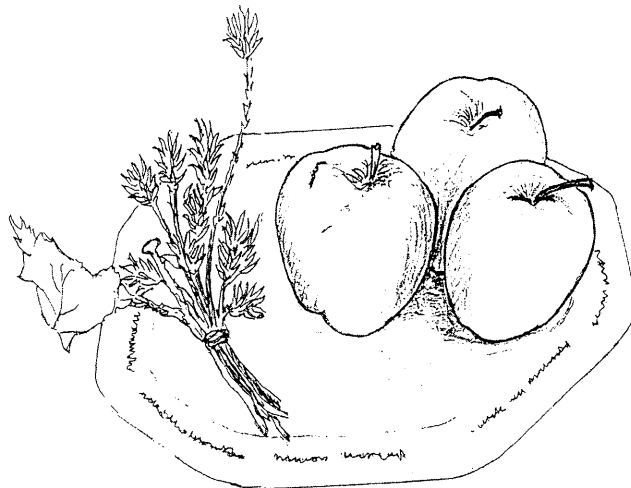
今回私が関わった子どもたちは、みんな明るくて、恐怖を体験したようにはとても見えませんでした。ですが、幼稚園の先生に話を伺うと、教室にいると窓ガラスが揺れる音で子どもたちが怖がるので、園バスの中で一晩過ごした。でも、余震の度にバスが揺れるので、みんなすごく怖がっていた。先生たちはずっと子どもたちの側にいて子どもたちが少しでも安心できるようにしていた。家族となかなか逢えない子どももいた。など、色々な話を聞き、心が張り裂けそうでした。幼い子どもたちが恐怖に怯えている。半年経った今でも、その恐怖は消えてはいないと思う。

そんな子どもたちに、ほんの2時間ぐらいだが、心から楽しめる時間を与えられたらいいと思い、私たちは、地域の子どもたちを呼んで、お菓子パーティーをしました。それぞれが好きなようにお菓子にトッピングをし、手や服までも汚しながら楽しんでいました。ハンカチ落としは、想像以上に盛り上がり、今この子たちは何も考えずに楽しめているだろうなとただただ感じる事が出来ました。それが本来の子どもの姿であるのだとおもいますが、それが出来ないのが被災地の子どもたちの現状です。一瞬でも子どもたちに「今日はここに来て良かった。楽しかった。」と思ってもらえたのなら、今回のボランティアの一番の収穫だと思います。

私はこのボランティア活動を通して1番印象に残っているのがふじ幼稚園でのことです。ふじ幼稚園に行く前は、震災にあった子供たちだし、どうやって接したらいいのか不安でいっぱいでした。でも子供たちに会ってすぐにその不安はなくなりました。子供たちはとても元気いっぱい、すぐに私に懐いてくれて楽しく遊ぶことが出来ました。でも楽しく遊んでいるなって思う反面、くっついて私から離れなかったり、お母さんに会いたいと泣き出したりする子がいました。子供たちなりに不安や恐怖を感じているんだな、笑顔で遊んでいるけれど心の中では不安や恐怖と戦っているんだなと思いました。

園長先生のお話を聞き、保育者に対する考えが変わりました。ふじ幼稚園では園児を助けている最中に1人の先生がなくなっています。今の私なら自分の命を犠牲にして園児を助けることは出来ないと思います。でも、ふじ幼稚園の先生方はみんな自分の命を犠牲にしてまで子供を守らなければと強い気持ちがあったのだと思います。保育者は大事な子供たちを、命をかけて守らなければならない職業だと思います。亡くなった先生方の行い、ふじ幼稚園の先生方の行動のお話を聞き、本当に私に保育者が務まるのか不安になりました。でも逆にふじ幼稚園の先生方のような命をかけて子供たちを必死で守れる保育者になりたいとも思いました。保育者は簡単な職業ではないんだと改めて感じました。

私はこの4日間の活動を通し、多くの貴重な体験、たくさんの方と出会うことが出来ました。出会った方々は、私たちを温かく迎えてくれ、とても親切でした。私たちが逆に励まされたことが何度もありました。私たちの活動が被災者の方の力になれたのか、役に立てたのか正直わかりません。でも1人でも私たちと出会ったことを覚えていてくれる方がいてくれたらうれしいです。この活動を通して学んだこと、経験を生かしていきたいと思っています。



仙台ボランティア1日目。

前もって、みんなで集まり準備を重ねたけれど、いざ当日になってみると本当に自分がボランティアに行くという実感は、あまりわかなかった。

仙台駅に到着すると、結構人がたくさん歩いていた。駅のいたるところには、「がんばれ、日本！がんばれ、東北！」の文字が見られた。仙台駅からレンタカーで移動し、仙台市若林区荒浜という津波の被害にあった地域の見学をした。そこに向かっていると、ある一定の場所から、がらりと急に景色が変わる。何もなく、ただ雑草が生えている。遠くからでも防風林が見えた。所々に瓦礫の山が見られるくらいだ。走っている車は、瓦礫の撤去作業のトラックがほとんどだった。地面には家の土台が残っていたりしたが、もとの場所には何があったのかさえ、わからない状況だった。海のそばまで行くと、津波がきたであろう高さまで防風林が茶色くなって枯れていた。それも、結構な高さのところだった。

仙台ボランティア2日目。

この日は地震と津波の被害を受けた、ふじ幼稚園を訪問した。ふじ幼稚園では、津波で園バスが流され、先生と園児が亡くなっている。ここには実際に地震と津波を経験した子どもたちがいる。さらに私自身、実習未経験ということで子どもたちに、どのように接したらいいのか、不安ばかりだった。園に到着すると、優しくて明るい先生方と元気いっばいの子どもたちが出迎えてくれた。私が思っていた以上に子どもたちは元気で活発的で、驚いた。初めは子どもたちに圧倒されてばかりだった。

私は主に年少さんのクラスの担当だった。園が再開され夏休みも明け、まだ最近入園したばかりの子もいた。保育時間が始まり、少しずつだが子どもたちの様子の変化が見受けられた。どれだけ元気に見えても急に不安になったりして、先生や私たちのそばを離れようとしないのである。そして、一人が泣き出すとみんながつられて泣きそうになる。給食のお弁当も、ちょっとだけしか食べてないのに「ぼく、もうこれだけでいいの」とあまり食べない子もいた。また、これは後から聞いた話だが、子ども同士の遊びの中で「お葬式ごっこ」というのが行われているそうだ。その話を聞いた時には、とても衝撃的だった。

子どもたちが帰った後、地震と津波の当日の実体験のお話を先生がしてくださった。このようなことがあったことを考えただけで胸が苦しくなった。途中から辛くてメモを取ることができなかった。涙も止まらなかった。本当に辛いのは先生方であるはずなのに、目の前で私が泣いてもいいのかわからなかったが涙を我慢することはできなかった。

先生方のお話を聞いた後、被災したふじ幼稚園の本当の園舎を見学しに行った。園舎には先生方が毎日通って、園舎の中も園庭も片づいていた。だが、園舎の壁には津波の跡が残っていた。私の背丈よりも少し高いところくらいまでできていた。

仙台ボランティア3日目。

南三陸町へ。車の中から見える光景に、想像をはるかに超える状態に、何を言葉にしていいのかわからなかった。1日目に行った場所もひどかった。しかし、南三陸町は瓦礫でさえも撤去できていなかった。

午後からは、フィリピンの子どもたちと遊ぶ時間だった。悪天候で子ども的人数は4人と、少なく残念だった。でもその分、ひとりひとりと、たくさんの楽しい時間を過ごそうと思った。ここでも、子どもたちは元気だった。2日目に続き、圧倒された。子どもとは折り紙をして遊んだ。ハートやツル、手裏剣などたくさん折った。好きな色の折り紙でメダルを作って、そこに名前を入れてあげたら、すごく喜んでくれて、私まで嬉しい気持ちでいっぱいになった。

帰り道、南三陸町を車から降りて見学することができた。この日は、雨が降っていたうえに満潮も重なり、川の水位も土のうが積んである、ぎりぎりのところまできていた。さらに、道が途中から冠水してなくなっていたり、地震と津波で海拔が下がって道端の側溝からは水がどんと、あふれ出していたりした。

仙台ボランティア4日目。

仙台教会で主日礼拝に参加した。主日礼拝は、毎週日曜日に行われる礼拝のことだそうで、いつもとは違う礼拝に少し緊張した。

今回、ボランティアに参加して、今までテレビで見ていた映像を実際に自分の目で見て、確かめて、経験してきた。テレビで見るのと現実とは全く違った。被災地に行ってみないとわからないことがたくさんあった。目をそらしたくなることもあったし、自分自身が辛くなることもあったが、もっと辛いのは被災された方々である。でも、この4日間出会った方は優しく、明るく私たちを受け入れてくださった。そして、前を見て、今この時を一生懸命に生活している。また、ふじ幼稚園の先生方からはとても大切なことをたくさん学ぶことができた。子どもたちの小さな命を預かる、守るということがどういうことかを痛感した。正直、保育者という仕事をこんなにも重く感じたのは初めてだったが、この状況の中、幼稚園を再開された先生方の強い姿を見て、私も先生方のような保育者になりたいと、より一層この仕事に憧れを抱いた。

被災地に行くと、何か私にもできることがあるのではないかと思い、今回のボランティアに参加した。でも、私には何もできることはなかった。ひとりの力は、こんなにも無力なんだと悲しくなった。だからこそ、たくさんの人の力が必要である。それはわかっていることだけれど、改めて学ぶことができた。そして、普段のこの生活がどれだけ奇跡なのか、幸せであるのか考えさせられた。今、何気なく過ごしている時間を大切にしようと思った。考え直す良い機会だった。このような経験は絶対にできることではないし、大変貴重な体験ができ、ボランティアに参加してよかった。ボランティアに携わってくださった方々には、本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。

私は、今回の『一緒に歩こう！プロジェクト』東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加し、テレビなどで見た現実以上の被害を自分の目・体で実際に感じる事ができました。始めは少しでもいいから力になりたいと思い参加しましたが、実際に参加してみると、私の力はほんとにこれっぽっちに感じてしまい、『私はなんのためにいったのだろう。ほんとに力になれたのかなあ。』という疑問が帰ってから頭から離れませんでした。実際に現地に行き被害の大きさ、津波などを経験した方からのお話、保育者の方の思いなどを聞かさせていただき、胸がしめつけられるようなおもいでした。

そんな状態の中で子どもたちと接する機会があり、子どもたちになるべく津波のことを思い出させないようにするにはどんな遊び、どんな会話をしたらいいのだろうと多くのことを考えてしまい、今振り返ってみると、始め子どもたちと会ったとき素直に笑顔で挨拶していたのかなあ？と思いました。なんでもっと素直に笑って元気にさせてあげることができなかったのだろうと、後悔しています。

また、わたしが伺った“ふじ幼稚園”は違う園の子どもが集まっている幼稚園でもあり、まだ保育が始まって1カ月もたっていない状態なので泣く子がいたり、まだ園に来られない子がいたりなど色々な状況があり、どう接しようと思っていました。来ている子どもは意外にも元気で私の手を取り、子どもたちから私を遊びに誘ってくれました。私は、そこで子どもたちの笑顔が見ることができほっとした反面、子どもなりに頑張っているんだと伝わり私も頑張らなきゃ！と思い、子どもたちに明るく接することができました。しかし遊んでいても私の手を離さなかったり、服の裾をつかんでいたりなど必ず私のどこかにふれながら行動しているのを感じ、やはりまだ恐怖や不安な気持ちがあるんだと感じました。しかし、元気に明るく遊ぶ姿も見られたのでこのようにすこしずつですが、みんなが登園でき明るく元気になってくれればいいなと思いました。

そして、ふじ幼稚園の園長先生のお話の中で子どもたちを自分の命をかけてまで助けた先生のお話を聞き、私も子どもを一番に考えることのできる保育者を目指したいと強く思いました。また被害で亡くなってしまった8人の子どもたちの分まで私は精一杯いきたいと思いました。

わたしはこのふじ幼稚園で多くのことを学び、今後の自分の生き方、私生活の過ごし方などを考えさせられる貴重な機会となりました。

そして次の日はフィリピンの親子と触れ合うことができました。

この日はフィリピンの親が今回の被害で日本語が分からず困ったという問題があったので、日本語の勉強などをする間、子どもたちと遊ぶというような活動でした。

まず、現地についたらみんなで顔合わせをしたあと、急遽絵本を読んでほしいといわれ、伺った月が私の誕生日ということもあり私が読まさせて頂くことになりました。私は大勢の人の前でよんだことがなかったのでとても緊張しましたが、精一杯読みました。下手な

りに一生懸命読んだらみんなが真剣に聞いてくれたのでとても嬉しかったです。そのあと『ありがとう。』と感謝され、とてもよい経験になりました。そのあと、子どもたちと遊びました。子どもたちは普通に日本語が話せるので、言葉に困ることはありませんでした。そこでも私はフィリピンの方々から笑顔の大切さ、感謝の気持ちなどを学ばさせていただきました。

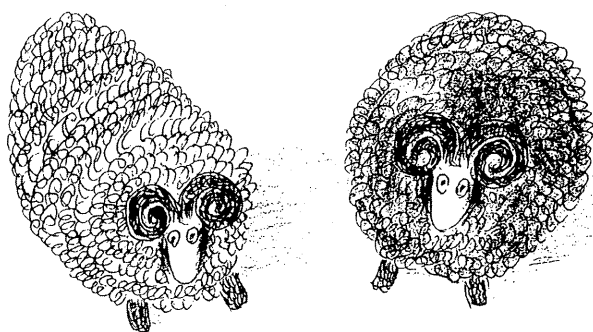
このように私はこのボランティアを通して、多くのことを学び、自分の肌で現実の被害の影響などを感じることができました。また、参加したことで逆に現地の方々から元気、感謝すること、みんなで協力することの大切さ、みんなの力の大きさなど多くのことを学ばせていただいたよい機会になりました。

しかし私はこのことをどう伝えればみんなに伝わるんだろう？とよく考えますが、うまく言葉にできないのが現実です。伝えたくても伝わらないので少しずつでもいいからみんなに伝えたいと思っています。

まずは愛知からエールを送るなどみんなで簡単なことから始めたいと思います。

東日本の方々も頑張っているので、少しでも力になるために協力したいと強く思いました。また現地の方のお話や実際に自分が感じたことを今後活かしていきたいと思いました。まずは、今を精一杯生き、この経験を活かしながら保育者をめざしていきたいと思えます。私はこのボランティアを通して、とてもよい経験をさせていただきました。私は、このようなボランティアができたことにとっても感謝しています。また、東日本の人々、このボランティアを行うに当たって協力していただいた方々、先生、一緒に行った仲間にも感謝しています。3泊4日ありがとうございました。

これからもみんなが幸せに暮らしていけるように協力しあっていきたいと思えます。



ウールで作った羊の人形

私は、9月1日～4日までの4日間、被災地である宮城県で震災ボランティアに参加しました。震災ボランティアと言うと、がれきの撤去作業などを想像すると思います。しかし、本学は将来保育者を目指すための大学です。そこで保育科の学生として今回被災した子どもたちのボランティアを計画しました。

仙台市若林区荒浜に行き、初めて被災地を目にしました。そこには家の土台があるだけの辺り一面の土が広がっていました。何もありませんでした。松本さんから木の色が変わっているところはそこまで津波がきたこと、その潮で木が枯れたことを聞きました。ところどころ色の違う木や何もない光景を見て、家が流されたのはわかりましたが、がれき等がだいぶ片付けられていたため、何か漠然としていて何が起こったのかわかりませんでした。ガソリンスタンドを見たときによく津波の恐ろしさを目の当たりにしました。柱は大きく歪み、今にも崩れてきそうで、怖かったです。言葉が出ませんでした。ガソリンスタンドを過ぎ、少ししたところには、小学校がありました。校舎の一部が損壊し、非常階段もぐしゃぐしゃでした。その中で校舎に掛けられた「たくさんの力をありがとう」と書かれた横断幕に目を惹かれました。車を降りて先生からお話を聞いたときに荒浜小学校でも何人かの生徒が亡くなったことを知りました。私は、あの「たくさんの力をありがとう」という言葉が忘れられません。一瞬で友達を失い、どこにもぶつけようのない気持ちの中書かれた言葉。周りの人に感謝しながら前を向いて進もうとする子どもたちの姿に思えました。同時に、この言葉に出会った私たちはこれからのボランティア活動に責任を持って取り組まなければならないと感じました。

二日目に山元町にあるふじ幼稚園に行きました。ふじ幼稚園では、この大震災による津波で園児8名、保育者が1名亡くなっています。また、津波によって園は使えない状態になってしまったため、山元町にある区民会館を間借りして8月1日に再開したばかりです。私たちは準備段階のときから園児たちとどう接したらいいのか正直悩んでいました。絵本や紙芝居を用意するのにも海のものや死が描かれている物語に注意しながら選び、2年生の先輩方と話し合いを重ねました。

当日、ドキドキしながらふじ幼稚園に入ると、子どもたちが大きな声で「おはようございます」と私たちを迎えてくれました。会う子、会う子が驚くぐらい元気でいつの間にか園児とどう接したらいいのかという不安もなくなっていました。そして、担当である年長組に入り部分的に保育に入らせてもらい、手遊びや絵本の読み聞かせをしました。私は、子どもの前で読み聞かせをするのは初めてだったので緊張しましたが、みんな真剣に聞いてくれて読み終わったときに「楽しかった」との園児の声がとても嬉しかったです。

元気いっぱいの子どもたちですが、気になる出来事もありました。朝の会の途中で妹と一緒に年長組入ってきた子は、下の子がずっとお姉ちゃんの傍を離れようとはしませんでした。まだ園に慣れず不安なのかもしれないし、震災で不安な気持ちがあるのかもしれないなと思いました。また、みんなの前で先生が一人の男の子を褒めたのですが、理由を聞くと震災以降、雨や天气が崩れると家から出られなかったのが雨が降っていた今日はお休

みかなと思っていたそうです。しかし、この日元気よく「おはようございます」と幼稚園に来ることができたのです。「きっと先週みんなで植えたひまわりにみんなでパワーをあげたからきっとパワーをもらったんだね」とみんなで拍手をして喜びました。この男の子は私とつい先ほど朝の会までの間に一緒に遊んでいた、ニコニコとした笑顔が印象的な子でした。今まで雨の日に外に出られなかったというのが信じられないぐらいいい顔をしてたのでこの出来事はずっと前から男の子を知っていたかのように私も嬉しかったです。それと同時に心の片隅にはまだまだ震災の傷があるのだと痛感しました。

自由時間には男の子たちとかくれんぼをしました。園は仮の場所であるためスペースは限られているのですが、「どこに隠れる？」と話しながらトイレに隠れたり、廊下の狭い空間に身を隠したりして何度も何度も遊びました。その中でも「あそこまで抱っこして」と何度もせがむ子もいたりして、言葉には出さないけれど、震災によって不安な気持ちがあるのかもしれないなと感じました。

午後からは園長先生から震災についての話があり、最初に気になる子どもについて学生一人ひとりから話をしました。年少クラスでは「お母さんに会いたいよ、おうちに帰りたい」と一人の子が言い出すとみんな口々に「帰りたい」と言い出したり、年中クラスでは朝の会の途中で突然泣き出す子がいたり、お昼ごはんのときに「～ちゃんが亡くなったんだよ」とか自由時間中遊んでいる子に「何してるの？」と聞くと、「今葬式ごっこしているから静かにしないといけないんだよ」と言われどのように答えたらよいのか困ったそうです。津波を経験した子どもたちが抱える不安な気持ちやお友達を亡くした子どもたちの心の奥深くにある深い深い傷は震災から半年が経とうとしていましたが、常にあると改めて感じ、一生消えないものであると感じました。そしてお話をしてくださった園長先生は震災当時出張で仙台にいたこともあり、津波にはあわずに済みました。しかし、園児や先生を亡くしたため、自分自身を責めながら話している様子で涙は流さないが、一つひとつ言葉を選びながらお話をされました。津波は想定外であったこと、そのため情報不足に陥ったこと、子どもたちを助けるために先生方が必死の救助活動を行ったこと、それでも亡くなってしまった園児がいること、先生も一人亡くなってしまったこと、園の再開までのこと、全てが想像の範囲を超えていました。しかし、聞いている自分たちはこれをしっかりと受け止めなければいけないと思いました。事実から目を逸らさずに真実を知ることが大事だと思いました。

また、車で元のふじ幼稚園にも行くことができました。園はきれいに片づけられていましたが、壁に残る津波の跡は自分の身長よりも高く、現実を突き付けられました。私は、園長先生が言われた「よかったね。今日お姉ちゃんたちがいっぱい来てくれたよ。本当によかったね。」という言葉が忘れられません。ここに来たことで私たちは亡くなった園児8人と会うことができたのです。ふじ幼稚園の園児全員と会うことができたのです。私は、献花台に「今日遊べて楽しかったよ」と心のなかで言いました。

今のふじ幼稚園に戻る車の中で園長先生がこんなエピソードを話してくださいました。それは園長先生が園児のお母さんから「子どもが津波にあったときに先生からチョコレートもらったんだよ。と言っていたのですが、本当ですか？」と聞かれ、当時バスに乗っ

ていた先生に確認したところ「そんなことはあり得ないです。たぶん亡くなった先生が最後まで子どものことを想い、あの恐ろしい状況の中で園児を励まし続けたことを園児がそのように感じたんだと思います。」と答えたそうです。このことを聞き、自分たちもそんな保育者になりたい、ならなければいけないと思いました。そして、今日あった全てのことを絶対に忘れてはならないと強く感じました。忘れるということが一番怖いこと。忘れられるということが一番悲しいことなのです。

三日目は、朝から台風の影響で南三陸のほうまで行けるかどうか危ぶまれましたが、行けるところまで行くことになりました。南三陸に入ったときに初日とは比べ物にならないくらいの光景がそこにはありました。がれきがまだ残った状態であちらこちらに船があったり、建物の上に車があったりとテレビではよく見ますが、実際に見るのとは全く違っていました。言葉がでませんでした。進んで行くと、途中で道がなかったため、違う道でベイサイドアリーナまで行きました。中に入ると、立ち入り禁止のメインアリーナ。そこにはまだ100体以上のご遺体が収容されていました。身元不明で未だ家に帰れない方がたくさんいるのです。それでもDNA鑑定で少しずつ身元が判明されているそうです。この光景は、津波がこれだけ多くの人の命を一瞬にして奪ったことを私たちに示していました。

昼ごろから予定通りフィリピンの子どもたちと会うことができました。最初はちょっと恥ずかしがっていましたが、すぐに打ち解けることができました。特に小学生の男の子2人は、元気いっぱい一緒にサッカーをしたりしました。雨が降ったり止んだりでしたが、それも遊びとして楽しんだり、部屋では電車のプラレールでレールをいろんな形に組み合わせていきました。気付いたら自分も一緒に楽しんでいました。震災後の仮設住宅の生活ではなかなか思いっきり遊べない環境のなかで、自分たちが今こうしてボランティアとしてできるのはなるべくいっぱい笑顔を引き出すことだなと思いました。そして、私たちと出会ったことで楽しんでくれたことが何よりも嬉しかったです。子どもたちと会ったのはたったの3時間ぐらいでしたが、今日出会ったこと、楽しかったことを忘れてほしくないと思いました。

仙台に戻る前に防災センターに寄りました。前半の時間帯で来たグループは正面から防災センターに近づけたそうですが、私たちのグループが訪れたときには川が増水し、地面から海水が噴き出していました。後に知ったことですが、天候が悪くなるとこのようなことが震災以降当たり前に起こっているそうです。防災センターにはまわり道をして正面まで行くことができました。この防災センターで亡くなった方の一人で津波のアナウンスをしていた職員の方がいました。この方は津波が来るときまでずっとこのセンターから避難のアナウンスをしていたそうです。職務を全うすることと自分の命を守ること、どちらも大切であると感じました。

これから自分たちがしなければいけないことは、このボランティアのことをこれから何十年先においても忘れずにいること、震災ボランティアで出逢うことができた人や子どもたちのことや、出来事を誰かに伝えるということだと思えます。そして私は将来、子どもたちのことを一番に考えてあげられる、優しい、優しい保育者に必ずなります。

9月1日(木)仙台駅に着いた時、ここが被災地だとは思えないほど皆普通に生活しているようでした。周りの建物も道路も名古屋と変わったところはなく唯一、駅の大画面に映し出されている映像が「がんばろう、東北」となっているだけでした。しかし、海沿いの方へ行き初めて被災地の姿を見ました。半年経っていることもあり、TVで見たような大津波が来た直後の光景とは少し異なり、内陸側の瓦礫の大部分は撤去してありましたが、海沿いの瓦礫はそのままでした。家は形が残っていても屋根や中が壊れていたり、形がない家もありました。庭に植えてあった木は海水で赤く枯れてしまい、どの高さまで津波が来たかという事ははっきり分かりました。海近くの小学校はとても授業を再開できる状態ではなく、壊れた二輪車の置き場になっていて、沢山の二輪車が並べてありました。それだけ見ても、大人はもちろん、小学生の子ども、幼稚園の子どもでさえも辛い経験をし、命が失われていく事を見たと思うと、子ども達の精神的なショックは経験していない私達には決して分からない事だと思いました。しかし、そこで同情するのではなく、私達に何が出来るのか、現地の方は何がして欲しいのかを考えていこうと思いました。

9月2日(金)気仙沼市の愛耕幼稚園へ行き、影絵を一緒に見させて頂きました。影絵を見るまで気づく事が出来ませんでした。影絵を見る為に電気を消し、部屋が暗くなり子ども達が怖がることを先生たちは気遣っていました。そのとき私は、単に暗くなるのが怖いのではなく、震災のあった直後に電気のない中過ごしたことを思い出して怖がるのだと思いました。

お昼ごはんの時、子ども達と色々なお話をしているとき1人の子がふと思い出したように地震があったときの話をし始めました。その子に続き周りにいた子ども達が次々に「怖かった」「足の所まで水来たんだよ」「おっきくガタガタしたよ。〇〇ちゃん泣いちゃった」というような言葉を発していきました。私はそういった言葉を子どもから聞くとあまり考えていなかったのととても悲しく思いました。そして、子どもに話されたとき「そうなんだ」としか言えない自分に無力さを感じました。そのくらい現実には重いもので、メディアなどで知る被災地とはどこか違うものでした。

園長先生からの話も聞かせていただき、被災者の方の心にはまだまだ傷があると分かりました。町も人々も元通りになるにはとても時間がかかると思うので、私達の支援は終わらせるべきではないと思いました。

9月3日(土)午後から私達の計画していたデイキャンプをしました。私達が泊まらせていただいたナタナエル教会の周りに住んでいる子ども達を呼び、お菓子作りや踊りなどをしました。子ども達の前に出てリードしていくことが初めてで、自分の思っていた通りには全然行かず、先輩方の手助けなしではまとまる事ができなかった思いました。子ども達から直接感想を聞くことは出来なかったですが、笑ってくれていたのが子ども達に楽しんでもらえたと思いました。同時に私も子ども達と良い思い出を作る事が出来ました。何よりも笑顔が見られてよかったです。

9月4日(日)朝早くナタナエル教会を出発し、青葉グループの人たちと合流しました。そして、仙台基督教会の主日礼拝に出席しました。そこで、柳城のボランティアという紹介があり、とても感謝してくれましたが、逆に私は今回のボランティアで名古屋では見ることの出来ないものや経験できない事を経験させていただいたので勉強になったと思いました。そして子ども達の笑顔を沢山見られてよかったです。又、初めての主日礼拝は学校の礼拝とは違い、難しくて何もわからない状態でした。礼拝後、仮の礼拝堂から、今まで行われていた礼拝堂に移動しました。そこには、壁が地震によってひび割れていたり、天井が崩れ落ちそうになっていたりと当時を物語っているようでした。けが人はいなかったという事を聞き安心しました。



私は、このボランティアに参加できた事をととてもよかったと思うと同時にとても感謝しています。

今回の東日本大震災がテレビでも大きく取り上げられ、その中で子ども達、特に幼児～小学生低学年代の多くが亡くなった事を知りました。テレビで話していたのは小学生ですが、友だちが亡くなり泣いていましたが、そこには前を向こうとしている姿がありました。まだこんなに小さい子なのになんでこんなに強いのだろう？この子は偉いのかもしれないけれど、悲しみを抑えているのではないかといろいろと考えてしまいました。そして、そんな子が東北にはどれだけいるのだろう、少しでもその子達を支えられたら…と思い参加したいと思いました。

9月1日被災地である宮城に着き、車で荒浜まで行きました。駅周辺や町では看板が骨組みだけ、などだけでしたが、町のはずれに向かうにつれて家の屋根がなくなっていたり、橋を越えるとガラッと変わるように家がなくなり家の型のような部分しかありませんでした。ガソリンスタンドは全体的に骨組みだけになり、木が波によって町のほうへななめになっていたり、とても無残でした。海のまわりの木はもちろん、家の木々も波をかぶり茶色に変色していました。その光景はいろいろなところで見られました。荒浜の子ども達は波で流されたご遺体をたくさん見ていると聞き、こどもたちの心に負ったものはとても深いだろう…と苦しくなりました。荒浜だけでなく南三陸町での防災センターやその周辺、ヨットに乗ったままの建物・気仙沼でも同じような状態でした。家がなくなり、さら地のようになっても所々にがれきの山が本当に大量になり、驚きました。JRの線路も途中で途切れていて崩れてしまっていました。

被災地に立っていると、人が住んでいた場所や町が1日の波でこんなふうになってしまうのか…と地震と津波の想像を絶する恐ろしさに愕然とし深い悲しみを覚えました。住んでいた人はどこにいるんだろう、大丈夫なのか、といろいろな気持ちがこみあげてきました。

2日目は、愛耕幼稚園へお邪魔させてもらいました。影絵とお昼ご飯をともに過ごして、人にタッチするのが好きな子達だなあと感じました。影絵を見ているときにはすごく楽しそうに見ているな、としか感じなかったけど、お昼ご飯のときに1人の男の子が私に「おねえちゃん、津波の時どこにいたの？」や自分の津波の時の体験を話してくれました。「恐くてこわくて…」と続ける子に「大丈夫だよ」としか声をかけられませんでした。他の子どもも続いて話してくれましたが、曖昧な答えしか返せず自分の未熟さを感じました。園におられた先生方は自分自身も被災者であるにもかかわらず、子どもたちを大きな愛で包んでいるように見えました。また、子ども達がタッチが好きなのは、単に園で流行っているかだけでなく、人と直接触れ合いお互いの『生』を確かめ合うことが大事なのかもしれないと感じました。被災して心に傷を負っている子ども達には、それを癒し楽しい気持ちに

させられるような話や言葉がけができるという、自分に足りないものがたくさん見えしました。

最後の日は仙台へ戻り礼拝に参加させていただきました。初めての体験で少し緊張しましたが、来られていた方々が先生に話していることを聞いたり、礼拝の紹介の時の先生の言葉や礼拝をしている最中にこの3泊4日を振り返っていると、本当にここにいる人達が生きていてくれてよかった…人が生きていてすごいことなんだ…と、この日とても感じました。言葉で言うことはできるけれど、本当に心から“生きている”ってことで泣きそうになったのは初めてで、純粹にそのことを自分で感じる事ができたことで人間的に少しだけ成長した気がしました。

今回のこのボランティアに参加して、テレビではなく、自分の目で見て、いろんな方々のお話を自分の耳で聞いて、感じて、体験することができて、今までの自分にはないものをいろいろ教えていただいた気がします。被災地に立って、こんなことって本当にあるんだと感じて悲しすぎる気持ちに落ちてしまっている時も、室根グループの先生や先輩方と過ごして楽しい気持ちになれました。帰ってみて、親に現地での話を尋ねられ、話そうとしても何故か涙が止まらず話すことができませんでした。今でも被災地で見てきたものを伝えなければいけないと思うけれど、話そうとすると頭の中でグルグルと映像が回り、言葉に詰まってしまうくらい、この経験は心に大きく影響を与えるものでした。

このボランティアは先輩方との時間も私にとってかけがいのない体験となりました。先輩に踊りや子どもに接する姿、学校のこと、普段では気づけないこと、多くのことを学びました。

岩手や宮城の方々、みなさんととても優しく、人っていいなと感じたり、本当に参加できてよかったと思います。でも、今回のボランティアで自分は何かできたのかな？と考えさせられる部分もありました。3泊4日という期間でしたが、これからの自分のことを考えられる機会にもなりました。そして、またこのようなボランティアの機会があったら絶対参加したいと思います。本当にこのような機会をいただき、ありがとうございました。いろんな方への感謝でいっぱいになりました。

最初ボランティアに応募した時は、迷いと不安でいっぱいでした。被災者の役に立ちたいという思いはありましたが、私に資格があるのだろうか、子どもたちとどう接したらよieldろうか、とずっと考えていました。

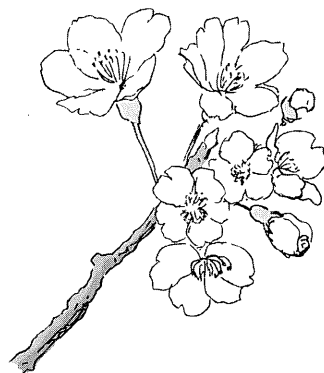
そして当日、仙台に着き周りを見渡して驚きました。ビルや建物がたくさん建っており、震災があったとは思えない光景があったからです。ですが車に乗りしばらく走って突然景色が変わった時、目を疑いました。若林区荒浜、ここは海に近いため家はほとんど撤去されて、何も無い状態でした。ところどころ家があっても、壊れて中が丸見えになっていました。遠くまで景色が見渡せて、ここにあったものは津波が全て持って行ってしまったのだと思うと、恐ろしくて言葉が出ませんでした。ですがこの後、さらに心が痛む出来事に遭います。

2日目、私たち青葉グループは山元町にあるふじ幼稚園を訪問しました。ボランティアに行く前この幼稚園で園児8名、先生が1名亡くなったことを聞いたので、どのように関わろうかと悩んでいました。中へ入ると子どもたちが興味津津で話しかけてきて、その笑顔を見ていると次第に不安がなくなっていきました。私は5歳児を担当し、最初は後ろから様子を見ていました。みんな本当に元気いっぱい、手遊びや読み聞かせの時も真剣に耳を傾けて実践してくれたので、悲しさが感じられませんでした。しかしお帰りの時間まで子どもと自由に遊ぶことになった時、一人の女の子が私を掴まえて遊ぼうと言ひ、他の子どもたちを入れずずっと側を離れませんでした。独占して甘えてくる様子から離れてほしくないという思いが伝わってきて、この子も津波を経験して心に傷が残っているのかなと思いました。その後集まってみんなが子どもたちと接して思ったことや感じたことを話し合い、お葬式ごっこをしていたことやお友達が死んじゃったんだよと言っていたことを知り、衝撃でした。子どもたちはまだ津波の出来事が消えないんだと思うと、聞いていて胸が苦しくなりました。そして園長先生のお話を聞きました。震災のあった3月11日は卒園式の準備中で200名近くの園児がいた。お帰りの最中に地震が来て、雨が降ってきたのでバスへ行ったところ津波がすぐそこまで来ていた。一台のバスはバスの屋根へ避難し、別のバスは流されて民家に止まったため家の屋根へ避難した。そこで布団などを借り、助けを待った。園長先生は自分がその場になくてとても悔しく悲しい思いをしているのに、伝えていかなければならないことだから、と震災の日の出来事を話してくださいました。その光景を想像すると子どもたちが経験した今回の事件は、私たちでは計り知れないものだと思います。先生も落ち込んだり先を見たりの生活をしているので、これからはそのような情緒不安定な生活が消えてほしいと思いました。話が聞き終わってから亘理町にある元のふじ幼稚園を訪問しました。行くまでにでこぼこ道を走って周りの家の状況なども把握したので、幼稚園の様子が気になりました。着くとまずお花やお菓子がお供えしてあるのが目に掛かりました。そこでお祈りをし、子どもたちに思いを伝えました。

それから中に入り、様子を見ることができました。中はきれいにされていましたが、私の肩の高さくらいまでくっきりと津波の跡が残っていたり、使えるまでにはまだ時間が掛かりそうでした。見終わって帰るときに、園長先生からバスが流されて民家に止まった場所を教えてもらいました。結構距離があったので、ここまで流されたのかと思うと津波の凄まじさを感じました。それから戻り、幼稚園を後にしました。他の先生方もとても優しく子どももいい子たちばかりなので、素敵な園だなと思いました。

3日目は南三陸町に行きました。ここもまた、突然景色が変わりました。まず木が変色していたのです。ふつうは緑色なのに、海に浸かったため紫色になっていました。とても背の高い木なのに、ここまで届くぐらいの津波が押し寄せたんだと思うと恐ろしかったです。がれきの山をあちこちで見たり、車や船が至る所に転がっていて唾然としてしまいました。テレビでもよく見かけた病院と防災センターを実際に側に行ってみました。病院には船が乗っかっていて、3階部分まで被害がある様子がわかりました。防災センターは最後まで残って警戒を呼び掛け、多くの人々を救った未来さんに対する花などが供えてあり、みんなでお祈りをしました。そうして車を走らせて志津川ベイサイドアリーナに着き、警察の方から現状など少しお話を聞きました。また移動し、フィリピンの子どもたちと遊びました。台風の影響のため人数は少なかったですが、子どもたちと関わりをもつことができ、楽しい時間を過ごすことができました。

ボランティアを通して一番に思ったことは、人々の温かい心です。震災の被害に遭ったのに会える人皆とても優しく、素敵な方たちばかりでした。よく見せようとわざと優しくしているわけではなく、心からの優しさが伝わってきて、何度も心がほっこりしたのを覚えています。皆こうやって助け合っているんだな、と思うと私も思いやりの心を持って、さらに人々の助けになりたいと思いました。最初はボランティアに行くことを渋っていましたが、今では行って本当によかったと思っています。ボランティアを通して得たものはとても大きいです。このことを忘れず、多くの方に被災地のことを知って頂けるように伝えていきたいと思いました。



今回この「一緒に歩こうプロジェクト」に参加し、実際に被災地を目の当たりにして、新聞やテレビでの報道だけでは伝わっていない悲惨な現状がわかりました。

1日目は、仙台駅から若林区荒浜を訪れました。すぐそばに海岸があり、津波で流されてしまった瓦礫が積んでありました。海岸から少し離れたところに荒浜小学校があり、その校庭には津波で流されて壊れたバイクがたくさん並べられていて、隣接している体育館は倒壊していました。

2日目は、山元町にあるふじ幼稚園を訪れ、午後まで子どもたちと過ごしました。ふじ幼稚園は、震災当時、園児51人を乗せて園庭に止まっていた幼稚園バス2台が津波に襲われ、園児7名が行方不明になり、津波で水を飲んでしまい衰弱した園児1名と、懸命に園児たちの救助にあたり力尽きた職員1名亡くなりました。子どもたちと接している時、最初はとても被災して辛い経験をしたようには思えないくらい、いたって元気に見えましたが、しばらくしてお互い徐々に打ち解けてくると、震災、そして津波のことを話してくれる子が出てきました。私は年中児のクラスに入ったのですが、給食を一緒に食べていたある女の子が突然、私に「先生、〇〇ちゃんが亡くなったんだよー！」と話してくれました。遊ぶ時間では、男の子がヘリコプターにお父さんが救助されている様子を描いた絵を見せてくれました。でも私は、その絵を見せてもらった当時は、そのような震災に関係する絵だとはわからず、男の子がお父さんの絵を指して「これ、僕のお父さんだよ！」と言って教えてくれた時、私が「わぁ、お父さんかっこよく描けているね。」と言うと、男の子は笑顔を返してくれたことを思い出します。絵の本当の意味を知ったときは、本当にびっくりしました。また、その絵を見せてくれた男の子としばらく一緒にクレヨンで絵を描いて話していて、ふと後ろを見ると一人でせっせと野菜やコップ等のおもちゃを並べている男の子がいました。その男の子に「何をしているの？」と聞いてみると、「お葬式の準備をしているんだよ。」と教えてくれました。私は最初聞いたとき、耳を疑いました。実際に子どもたちと過ごしてみると、ひとりひとり震災の傷を深く負っているのだということがわかりました。また、津波の被害に遭ったふじ幼稚園の現場にも訪れ、入ると、壁に津波の跡がくっきりと残っていました。それは私の身長より高いところまであり、改めて、津波の恐ろしさを感じました。

3日目は、南三陸町で日本語の勉強をしている、小さなお子さんをもつフィリピン人のお母さん方、またそのお子さんたちにお会いしました。志津川ベイサイドアリーナの会議室を使わせていただき、そのお子さんたちと一緒に遊びました。子どもたち皆とても元気で、パワーをもらいました。津波被害に遭い、防災庁舎の面影はなく、鉄骨がむきだしになっていました。この防災庁舎で津波が到達するギリギリまでアナウンスで住民に避難を呼びかけ続け、建物とともに津波にのまれて亡くなった女性職員である遠藤未希さんの献花台が、供えられていました。テレビでの報道で、この話を耳にしたことがあったので、実際

にその現場を目の当たりにして、想像以上に凄まじい光景に圧倒され言葉が出ませんでした。ちなみにここには2回見に来たのですが、1回目にお昼ごろ訪れた時に普通に通過することができたのに、地盤沈下によって夕方2回目に訪れた時には浸水していて通ることが難しくなっていました。

私は、この4日間ボランティアに参加をしてみて、震災の被害の凄まじさ、重さを肌で感じることもできたと同時に、被災地の方々の温かさつつらい状況の中でも元気に頑張っている姿に励まされました。私はこの先もし辛いことが起きても、めげずに精一杯頑張っていこうと思います。



スウィートピー

9月1日

仙台駅について思ったことは、名古屋みたいに普通に建物や大きなテレビがあって人も普通に生活していて、本当に地震が起きたのか、と疑問に思うほどでした。

仙台市に着いて、実際に被災地現場（仙台市若林区荒浜）に立ってみました。テレビや新聞で見ているだけでしたが、初めて、リアルな現場を見て、驚きというより呆然としてしまいました。1番印象的なものが、ガソリンスタンドが一目見てすぐわかりませんでした。また、家の土台しか残っていなかったり、草原に車が流されたままだとか、小学校の体育館の屋根がなかったり、塩水で松の木が茶色になったり、津波の向きに木が斜めになっていたりと、津波の影響はこんなにもすごいものだな、と思いました。子供たちが普通に歩いていたり生活をしているのに胸が痛みました。

9月2日

仙沼愛耕幼稚園へ訪問し、一緒に礼拝に参加させていただきました。礼拝中での歌が、手話をしながらしており、私も手話の勉強をしてみたいなと思いました。

影絵の公演を見て、初めての影絵で圧倒されました。裏の機械や人形も見させていただいたので、すごく得した気分になりました。

お昼ご飯を園児と一緒に食べましたが、園児に「〇〇ちゃんは〇〇幼稚園からきたんだよ」とか「わたしのおばあちゃんは大きな津波で今病院にいるの」など実体験を聞かされて私は「そうだったんだ、大変だったんだね」としか答えることができなくて、とても心が痛みました。

また実際に体験した園長先生の話聞くことができとてもリアルで本当に起こったのだ、と改めて実感しました。

幼稚園を後にして南三陸町に足を運び、未希さんが最後まで住民に叫び続けていたので、防災センターの場を見に行きました。未希さんのおかげで、たくさんの方が助かったと思うので素晴らしい人間像に感動しました。

9月3日

教会付近の保育園かと思っていましたが、小学生の子供たちと1日を過ごしました。

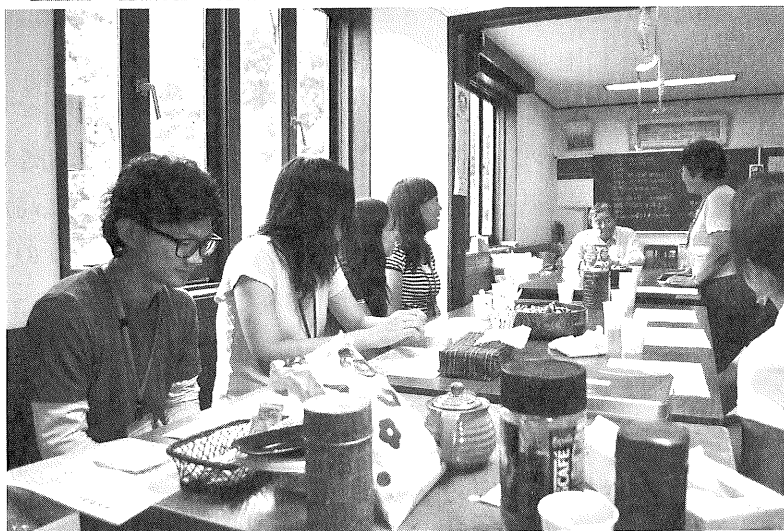
園児と違って接し方も変わるし、話し方も違うので説明するのがとても困ってしまいました。人数も集まるか不安でしたが、隣に住んでいる子のおかげでたくさん集まってくれてゲームやおやつ作りや紙芝居などをして、楽しみました。被災地の子供たちが少しでも、私たちが企画したことが楽しい思い出になっていたらいいな、と思いました。

9月4日

仙台の教会で、柳城でやっている礼拝とはところどころ違う主日礼拝に参加しました。どこを読んでいるか、とか今何をしているのか、などわからなくてとてもとまどってしまいましたが、とても新鮮で、いい経験になりました。このボランティアに参加しなければ、このような礼拝にも参加できなかつただろうし、とてもありがたいことだな、と思いました。被災地の方々は、とても大変なのに私たちが快く受け入れてくださってとても感謝したいです。

まとめ

この4日間のボランティアを通して、とても思い出深いことがたくさん残っていました。このボランティアに参加しなければできないことを経験したり自己満足だとしても仙台の子供たちが少しでも明るくなったり、いい思い出の一つになってくれたらいいな、と思いました。



東日本大震災から半年が経った9月1日～4日までの4日間、東日本復興ボランティアという形で、実際に被災地に立つという機会がありました。私の通っている名古屋柳城短期大学は日本聖公会に属しています。日本聖公会では、「いっしょに歩こう！プロジェクト」～日本聖公会東日本大震災被災者支援～というボランティア活動をしていて、仙台オフィスに事務局があります。柳城短期大学の生徒は兼ねてから被災地に何かすることはないか考えていました。支援物資から始まり、先生方の働きかけのおかげで「いっしょに歩こうプロジェクト」に参加できるようになりました。その中でも保育科ということもあり、被災地の子どもと実際に触れ合いや話し合いをしてみんなに伝える。今回のボランティアは、瓦礫の撤去ではなく子どもに関係するものについてになりました。

一日目、仙台に着き若林区荒浜に訪れました。荒浜区は総人口 132,159 人でした。津波によって家が土台だけを残して家ごとなくなっていました。海のそばにあったたくさんの林が根こそぎ流され、流されなかった木は津波をかぶったので枯れて茶色くなっていました。荒浜小学校には数えきれないほどのバイクや壊れた自動車が並べてありました。瓦礫は少し片づけられ、特に目立ったものは、ぐしゃぐしゃにつぶれてしまった自動車、コンクリートがむき出しにされた家、流されてきたのか、本来あるべきではない場所に倉庫のようなものがありました。老人ホームのスタッフの方は近くの中学校に無事に非難したことを伝えるため、張り紙を残しに来られたところに津波に遭い、命を落とされたそうです。

二日目、私は山元町のふじ幼稚園に行きました。ふじ幼稚園は津波で園児 51 人を乗せ、園庭に止まっていた幼稚園バス二台が襲われました。大型バスは正門の塀にひっかかり止まったけれど、小型バスは 100 メートルほど離れた民家まで流されたそうです。大型バスではドアを開け、園児をバスの屋根に乗せ脱出させましたが、園児七人が行方不明になりました。小型バスは民家の屋根に園児を抱きかかえ移動させましたが、水を飲み衰弱した園児一人と、救出で力尽きた職員の方が亡くなりました。大型バスの園児は園舎の二階で、小型バスの園児は民家の二階で夜を明かしたそうです。

ふじ幼稚園で園児と接して、明るく楽しく過ごして笑っている園児の不安や心の傷を知りました。ブロック遊びを男の子二人としているとき、高く積み上げる子に「高いね」と言うと「だって高いと安心だよ」「津波が来てもこんなに高かったら大丈夫だよ」と話してくれました。「先生、見て」とやってきた絵をかいた女の子は「この前やっと花火を家でしたんだよ」と教えてくれました。お昼ご飯を食べているときには、「おちゃん津波で死んじゃったんだよ」「おちゃんのお葬式に行ったんだよ」という話を聞きました。ボランティアに参加した友だちは「お葬式ごっこ」をやろうと誘われたそうです。少しだけお時間をいただき、紙芝居を読み聞かせをすることになりました。学校でも紙芝居の読み方は教えていただいてなく、困っていると移動の間、先輩に紙芝居の読み方のコツを教えていただきました。初めて子どもに紙芝居を読みましたが、子どもたちは語りかけにも積極的に答え

てくれてとても助かりました。少し読み間違えをしてみたり、とっさに勝手にアドリブを入れてしてみたりしたので、次に読むときはもっと何回も読み方を練習して上手に読んであげられるようになりたいです。保育に参加した後、園長先生のお話を聞きました。園長先生は職員の方と園児たちが亡くなったことをとても後悔していて、自分を責めていることを知りました。きょう一日お邪魔させていただいて気になったことを聞いていると園児の心の傷は深く、心のケアも必要で時間がかかってしまうと思いました。廊下の机の上に亡くなった園児と卒園した卒業生の写真が置いてありました。実際に被害の遭った前のふじ幼稚園に行ってみると、私の身長より少し低い位置の壁に茶色く津波の跡が残っていました。泥はボランティアの方のおかげで綺麗に取り除いてありましたが砂や埃がいっぱいありました。津波の被害に遭った土地ではもう暮らしていくことが難しいと知ったので、幼稚園を前の場所で続けていくことはとても難しいと感じました。

三日目、南三陸町に行きました。南三陸町は町全体が壊滅してしまい、瓦礫の撤去作業が全く進んでいませんでした。特に目立ったのは漁船でした。建物が津波で鉄骨だけ残されていたり、車や建物が大破していたり、病院の上に船が乗っていました。

仮設のコンビニエンスストアなどが設置してありました。前半後半に分かれ、フィリピンの子どもたちと接することになり、後半になりました。お昼を食べた後、待ち時間に防災センターを見に行きました。職員の遠藤未希さんは住民の方に避難を呼び続けました。自分が津波に巻き込まれるかもしれないという危険な状況にもかかわらず、最後まで避難を呼び続けていました。遠藤さんは、建物とともに波に飲み込まれて殉職しました。鉄骨だけとなった防災センターの前に花束や飲み物、食べ物と一文が書かれた紙が添えられていました。夕方に再び訪れると、地盤沈下によって浸水し、行きは花束が供えてあった場所までまっすぐ歩いて行くことができたのに、大きな水たまりのようになっていて、回り道をしないとたどり着くことができませんでした。川は同じように増水していました。仮設住宅でフィリピンのお母さんが日本語を勉強している間、近くにあるベイサイドアリーナで子どもたちと遊びました。最初は少し緊張しているようでしたが、少し遊んでいると緊張が解けたのか積極的に来て同じ遊びをしたり、折り紙を折って披露してくれたり、おもちゃの遊び方を教えてくれて一緒に遊びました。「絵本を読んで」と言われたので初めて子ども前で絵本を読みました。緊張しましたが真剣に聞いてくれる目に答えようと、噛みながらも無事読み終わりました。「ありがとう」と言ってもらえて、とても嬉しかったです。被災地では、今でも遺体が見つかることがあるそうです。ベイサイドアリーナでは見つかった遺体、身元が未だにわからない遺体は腐敗防止のため火葬して遺骨の状態にして、前までは避難場所として使用していた体育館を「遺体安置所」として 100 体以上保管しているそうです。DNA鑑定などの説明の書類がたくさん掲示してありました。まだ見つかってない家族を確認しに、多くの家族が遺族の方が訪れるそうです。

新幹線を降りて実際に被災地へ着いたときは被災地とは思えないぐらい綺麗で驚きました。しかし、すこし海のほうへ移動すると、さっき見た景色と同じ県だとは思えないよう

な姿で言葉を失いました。ふじ幼稚園の子どもたちは、被災したとは感じられないくらい明るくて、すごく甘えてきました。でも接しているうちに、それは、津波を経験し、怖い思いをして親や先生を困らせないように明るく何もなかったように振る舞い、甘えている姿に見えてきました。時々、園児の津波の体験談や、亡くなった友だちの話や、亡くなった職員の先生が最後まで子どもたちを助けようとして殉職なさったことを聞いて、私が保育者になって津波のように子どもたちの命が危なくなった時に、私はその先生のように自分の命も危険にあるのに子どもたちに全てをかけて助けようとする事ができるのか、不安になりました。それから、遠藤さんが殉職された話を聞いた時に、自分の気持ちの甘さを知り、とても恥ずかしく思いました。生きていて初めての参加するボランティアを友だちと一緒にいき、初めて宮城県に行く。心の中で私は小さな旅行のように思っていました。けれど被災地では、他人のために命を落とした人、お母さんや家族を亡くした子ども、子どもを亡くした親の人がたくさんいて、いまだに余震がくると大きい地震への恐怖と闘い、頑張っている人々の姿がありました。軽い考えでボランティアに来てしまったことに涙そうになりました。「頑張れ」と言ってもいつまで頑張ればいいのか分からない、「辛かったね」の一言も軽はずみに言えないけれど、せめて笑って暮らしてほしい、被災する前のような笑顔になるのは難しいけれど、苦しい時を笑顔で頑張っていけるように少しでも、小さなことでもいいから力になってあげることができるといいなと思いました。そのためには、支援物資も義援金も大切だけれど、被災地の人たちを温かい目で見守って、支えが必要な時はいつでも支えられるようにするのが、子どもでも、大人でも、私たちにできることではないかと思います。今回のボランティアでは、私たちが力になろうと思ったのに、被災地の人に助けていただくことが多くありました。自分のことで精一杯なはずなのに優しくしてくださったことに感謝してもしきれません。ボランティアに関係なく、困っている人に手を差し伸べることの大切さを学ばせていただくことができました。今回貴重な体験をさせていただき、東日本大震災を教訓に、災害が起こった時にどのように子どもたちや人々を守り、考えて行動に移し、このような悲しいことがもう起こらないようにしていくのか、それを考えるのが私たちのこれからの課題だと思います。そのためには、まず、わたしたちが東日本大震災で見てきたことや感じてきたこと全てを、学校のボランティアに行っていない生徒や、あまり現状を知らない人々に伝えなければならぬと思います。それから、災害がきた時にどのように園児を守るのか、日頃から何に気をつけるべきなのかをしっかりと学び、私も遠藤さんやふじ幼稚園の先生方のように子どもたちを守っていける保育者になりたいです。いま授業で習っていること、実習で学ぶことは基本のことなので、基本をしっかりと学び自分のものにして、実践していきけるように頑張ります。

「まだ半年しか経っていない」。気仙沼愛耕幼稚園の園長先生のその言葉は、私達の震災に対しての印象と、一番異なっているものではないかと感じた。被災地で生活をしていない私には、日々の普通の生活や、ニュースや話題が次々に変わっていく中で、知らず知らずのうちに「もう半年も経った」という思いがあった。しかし、被災地で生活する方にとって、仮設住宅での生活や、復興の目途が立たないままの生活は「まだ半年」という切実な思いになっているのだと感じた。幼稚園で言えば、子どもたちは半年たった今でも夜泣きや夜叫がおさまらない。半年経った今も、震災の恐怖や不安と闘いながら生きている。

そうした生活の中で、保育者は、自分も被災者でありながら、同じ被災者である子どもやその家族をどのように受け入れ、どのようにケアしていくかを、子どもたちのために考えている。当たり前なのだが、保育者も被災者であることを、被災地に赴くまで気づかなかった。私は自分が大変なときに、どれだけ人のことを想って生きられるだろうか。被災者でありながら、「保育中だけは」と目の前の子どものことを想う被災地の保育者のようになれたらと思う。

「そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』」（『新約聖書』マタ 25.40）

「そこで、王は答える。『はっきり言うておく。この最も小さくされた者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』」（『新約聖書』マタ 25.45）

このように被災地では、「被災者だから誰かに助けてもらおう」という思いよりも、「なんとか自分たちができることで、自分たちで助け合って生きていこう」という思いを感じた。そうしたことを感じる中でふと、上の聖句を思い出した。ここでいう「最も小さくされた者」とは、子どもや高齢者などの「社会的弱者」のことを指す。今回の震災で、被災地で生活する方々は、聖句で言うところの「最も小さくされた者」の中でも「最も小さくされた者」になったといっても過言ではない。しかし、被災地の方々（保育者）は、それでもただ一方的に支援を受けるのではなく、自分が「最も小さくされた者の中でも最も小さくされた者」の当事者になりながら、自らも人を助けようとし、目の前にいる人に対する優しさや、自分の仕事に対する責任や誇りを感じ、「自分たちのできることで助け合う」こと

をしていた。それは身を削っているという感じではなく、自分を含めた被災者を心の真ん中に据えて生きているからだろう。つまり、それが支え合うという「つながり」のあり方なのだと思う。

今回行った自分たちは被災地の人たちとのつながりをもった。これからは、被災地の保育者がそうであったように、被災地の人たちを自分の心の真ん中に据えて生きていきたい。そして、現地に行くことができた私たちは、この経験や感じたこと、被災者の方々の思いを人に伝えることで、今度は私たちが、他の人とのつながりになっていきたいと思う。だから、私は、今回のボランティアでのできごとを、柳城の学生に伝えたいと思うのだ。



※次号は 2011 年 11 月 1 日発行予定です。

News Letter 第3号

2011年10月20日発行

発行人 本部長 主教 加藤博道

編集人 事務局長 司祭 中村 淳



いっしょに歩こう! プロジェクト

日本聖公会東日本大震災被災者支援



仙台市ボランティア宿泊施設の環境整備



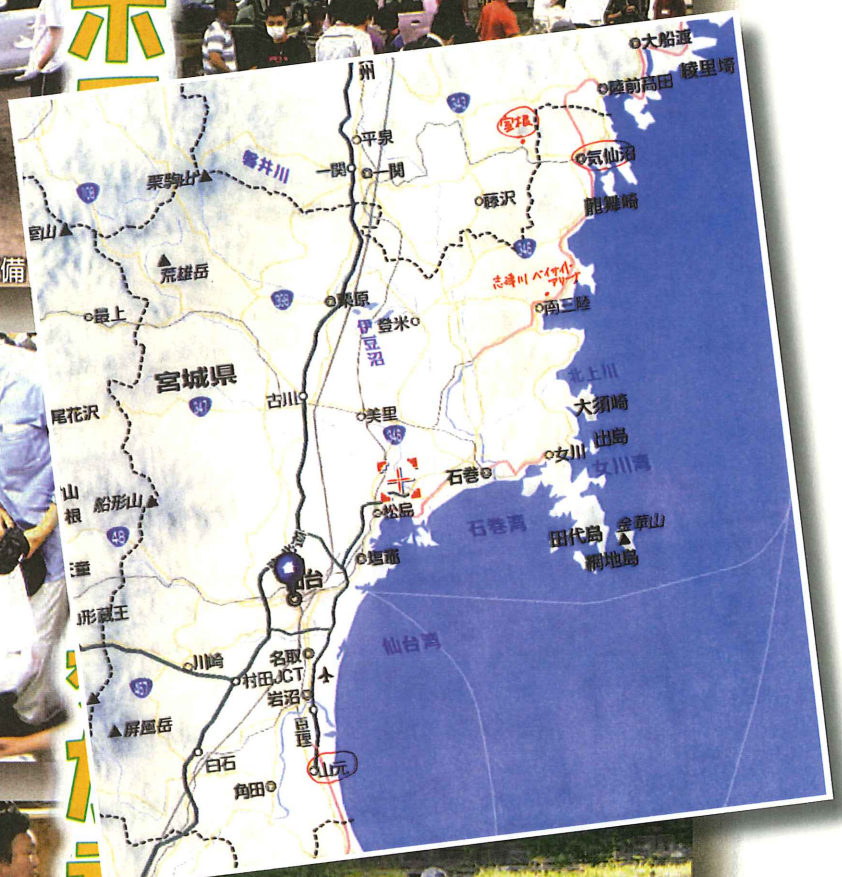
石巻市の仮設住宅での支援物資配布



岩手県一関市室根聖ナタナエル教会での“子ども会”



ボランティア宿泊施設の環境整備





涙の卒園証書

東日本大震災の津波で通園バスが流され、園児8人と職員1人が死亡した宮城県山元町の私立ふじ幼稚園(園児181人、昨年5月1日現在)で、23日、卒園式があった。出席した保護者によると、死亡した8人のうち3人が卒園予定で、遺影を手にした遺族らが卒園証書を受け取った。

宮城・山元町 幼稚園児8人死亡

子園長が「助かったみんなは命を大切にしてください」と話したという。続いて亡くなった園児を含む69人の卒園生の名前が読み上げられ、一人一人に卒園証書が手渡された。亡くなった園児の名前が呼ばれると、遺族や職員が遺影を持って壇上に入り、会場に父母たちのすすり泣きが漏れたという。

遺族「娘との思い出すべて宝」

亡くなった木村萌(ちむ ゃん)の父康文(ちむぶん)は、娘がいない卒園式には来たくはなかった。でも娘が楽しみにしていたので、娘の代わりと想って、出席することにしたという。それでも式後、「楽しみにしていたランドセルを背負わせてやれなかったのがつらい。泣いた顔、怒った顔、笑った顔、いろんな表情を思い出します。すべてが宝です」と沈痛な表情を浮かべた。証書は仏壇に供えて、萌(ちむもん)ちゃんに報告するつもり。

幼稚園による保護者への説明などによると、当時、2台のバスで園児を運ぶ予定だったが、園児を乗せたバスが津波にのまれ、7人が津波にのまれた。大型バスには33人を乗せた後に津波が到達。小型バスは約150人が離れた民家まで流されて止まった。職員が園児をバスの屋根に上げて民家の階へ避難させたが、1人が死亡した。職員1人も園児を助けた後に亡くなった。

園長が「助かったみんなは命を大切にしてください」と話したという。続いて亡くなった園児を含む69人の卒園生の名前が読み上げられ、一人一人に卒園証書が手渡された。亡くなった園児の名前が呼ばれると、遺族や職員が遺影を持って壇上に入り、会場に父母たちのすすり泣きが漏れたという。

「いっしょに歩こうプロジェクト」事務局

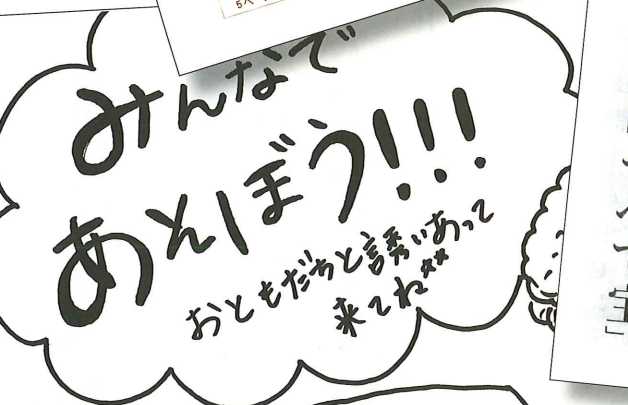
「いっしょに歩こうプロジェクト」事務局
 (Open)月～金 10:00～17:00 (Closed)土・日・祝
 〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町3-4-8 クライス
 TEL:022-285-5221 FAX:022-748-5321
 E-mail: walk@nask.org URL: http://www.nask.org/walk/

※第2号掲載記事に誤りがありました。お詫言申し上げます。訂正いたします。
 ページ右上の表の津波による半壊の欄 誤198 → 正119

勝手に学生18名、スタッフ5名の団体を2班に分かれての活動となりました。ひとつは、仙台を拠点としながら、宮城県山元町山元ふじ幼稚園(園児は被災のため区長職での保育)、南三陸町高田川(フィリピン女性の卒業生とかがかり)のある交流)、ひとつは、本学の卒業生とかがかりのある宮城県山元町 愛研幼稚園(園児、若手第一陣市役所職員など)の子どもの共通は被災地と立脚点として、両者のグループの交流でした。ボランティアというには、到達はなない活動でしたが、現地に立ち寄り、現実を自分の目で見て、体験者のお話を聞くという経験は同じでも交流のいものとなりました。また、子どもたちの交流を通して命をかけての保育や支援に「保育とは何ですか?」という疑問を見せたいという思いがありました。

参加者の多くの学生にとって、今回の経験は、心の奥深くで刻み込まれたことでしょう。本心は、今回の学生たちの経験を全学で分かち合いたいと少しずつ取り組むの時間を待ちますが、学生たちの思いは本格的にはこれからですが、多岐にわたる思いは本格的にはこれから紹介したいと思えます。

9月2日「仮設のふじ幼稚園へ訪問しました。子どもたちは、とても元気で元気な子どもたちだと感じました。でも、かわわっているところ、子どもたちが安全なんだよ」という声も聞こえてきた。子どもたちの喜びのなか、津波で体験したことや身の回りでも起こったこと、今でも雨の日の思い出もよく分りました。楽しくきれいな景色で、お絵描きをして、お給食も食べてきました。被災した子どもたちの思いもよく分りました。被災した子どもたちの思いもよく分りました。被災した子どもたちの思いもよく分りました。



名古屋の学生と一緒にあなまう!!!

☆おやつ作り
 ☆体操あそび
 ☆絵本の読み聞かせ

名古屋柳井成興短期大学保育科

最後までマイクを離さなかった遠藤さん

宮城県南三陸町は、町全体が津波で壊滅してしまいました。同町の防災センターの職員・遠藤未希さんは住民に向かって避難を呼びかけ続けましたが、建物と共に波に飲み込まれて殉職しました。鉄骨だけが残った防災センターの前に花束とともに次の一文が添えられていました。

未希さんへ

未希さんの声が忘れられません。
未希さんの「み」は「未来」の「み」
未希さんの「き」は「希望」の「き」
未希さんの声で助かった人は、
未来に希望を持って生きていきます。
ご冥福をお祈り申し上げます。



東日本大震災、ボランティア募集！！

2011・7・13

名古屋柳城短期大学キリスト教センター

震災から4ヶ月が過ぎましたが、被災地の方々の困難、悲しみ、苦しみなど想像に余りあるものがあり、皆様も心を痛めておられることでしょう。このたび、被災地の方々とともに歩みたいという気持ちで、本学も大学を挙げてボランティア活動に参加することとなりました。詳細はこれからですが、下記のような計画です。参加したい方は、保護者の方々とよく相談の上、申し込み用紙に記入し、事務局・総務課に提出してください。また、相談したい方はチャプレンや学務委員の先生方に遠慮なく申し出て下さい。

期日：9月1日（木）～4日（日）

募集人数：10名

参加費：1万と食費（実費）

申し込み締め切り 7月25日（月）

行き先：仙台市（聖公会のボランティア）

いっしょに歩こう！プロジェクト ボランティア

集合

2011年9月1日（木）9時00分
JR名古屋駅エスカ方面「太閤通口」銀の時計付近
団体乗車券にて乗車します。遅刻厳禁。

解散

2011年9月4日（日）19時50分
JR名古屋駅エスカ方面「太閤通口」銀の時計付近

宿泊先

【青葉静修館】
〒981-0905 宮城県仙台市青葉区小松島3丁目1-77
電話 022-274-0533

【室根聖ナタナエル教会】
〒029-1201 岩手県一関市室根町折壁字屋敷中104-5

服装

子どもと十分遊べるスタイルで

持ち物

しおり、シーツ、枕カバー、防寒用衣類（特に室根は山間部なので朝夜は気温が下がる）、虫よけ、マスク、筆記用具、健康保険証（健康保険証コピー）、着替え（上着など温度調節ができるもの）、軍手、雨具、各自常用している薬、洗面用具、寝巻、タオル、バスタオル

いっしょに歩こうプロジェクト事務所

TEL・FAX 022-265-5221

あとがきにかえて

「3・11以前」「3・11以後」という言い方がなされるように、たしかに日本は2011年3月11日を境に大きく変わったように思う。

東北を中心に東日本を襲った大震災・大津波の出来事は、それ以前の日本とそれ以後の日本との間に大きな亀裂を生じさせ、その亀裂の鋭利な先端は、一年経った今も、さまざまな形で私たちに突き刺さってきている。

ただ、地震や津波が引き起こした断絶的な側面だけに注目するのは、一面的すぎるであろう。たしかに津波にのみこまれた人は戻ってこない。すべてが元通りになることはありえないだろう。しかしながら、そういう中で、新たに生きようとしている、元気を少しずつ取り戻そうとしている、希望の光を見出そうとしている数多くの人々がいることにも目を留める必要があるだろう。

今回私たちが、ボランティアという名のもとに行ったささやかな活動も、被災地の大きな傷跡を目の当たりにしながらも、その中で、新たに今を生きようとしている東北の方々と動きを共にして、そこに連なっていくということに他ならなかったのではないだろうか。

柳城はとても規模の小さな学校ではあるが、今から53年前の伊勢湾台風（1959年）のときにも、17年前の阪神淡路大震災（1995年）のときにも、多くの学生が被災地に足を運び、積極的な活動を行った。

「愛をもって仕えよ」という建学の精神が、110年以上にわたって受け継がれているのは、その時代その時代にこの精神を自分たちの精神として生きようとしてきた先輩たちがいたということの何よりもの証しである。そのような証言を語り継いでいくことは、私たちの大切な責務のひとつであろう。

この小さな冊子が、そのような柳城の歴史の一コマを示すものとなり、さらには今回の東日本大震災の被災地への思いを継続的に持ち続けることにつながればと心より願っている。

2012年3月

宗教委員 菊地 伸二

発行日 2012年3月16日
編集 名古屋柳城短期大学 キリスト教センター (宗教委員会)
発行 名古屋柳城短期大学
〒466-0034
名古屋市昭和区明月町2-54
TEL 052-841-2635 (代)
FAX 052-841-2697
印刷 株式会社 一誠社

